

倭王権の地域構造

小古墳と集落を中心とした分析より

Regional Structure of the Yamato Polity :
An Analysis Focusing on Small Mounded Tombs and Settlements

松木武彦

MATSUGI Takehiko

はじめに

①分析の視点と方法

②岡山平野における古墳と集落の動向

③古墳時代における列島諸地域の社会構造と倭王権

おわりに

【論文要旨】

本論の目的は、古墳時代の倭王権を支える地域の構造とその変化を、これまで注目されてきた前方後円(方)墳を主体とする「首長墓」だけではなく、小墳群も含む墓制の全体的構造、それを営んだ居住域の展開、および両者の相互関係とその推移を明らかにする作業を通じて、政治のみならず、人口や生産も含んだ社会全体の歴史過程として復元することである。

この目的を達成するため、岡山平野南部を対象地域として、まず、前方後円(方)墳と小墳群、およびそれらと集落との空間的關係を分析した。その結果、前方後円(方)墳には、小墳群中に営まれる小規模なもの、小墳群に近在する中規模なもの、小墳群から独立した大規模なものからなる段階差があり、それは在地の小有力者から倭王権に直結した大有力者までの序列を示す可能性が高いが、集落との関係から、地域社会の基礎的な単位となるのは前者と考えられた。

この基礎的な単位は、古墳時代前期前葉～中葉には岡山平野の各地域で発展・継続するが、前期後葉～中期中葉には多くの地域で衰退・断絶し、少数の限られた地域に巨大な前方後円墳が築かれた。この変動は、集落や住居の数の急速な低落と時期を同じくしていることから、人口が減少して空洞化した地域社会を、倭王権と直結した大有力者がじかに統括するようになった状況を推測した。これをきっかけとして再び集落と住居の数が回復し、小墳群からなる基礎的な単位やそれに根ざした中小の前方後円墳が復活する中期後葉は、人口の回復によって地域社会が再興し、在地の小有力者がまた台頭した可能性が高い。後期前半には集落と住居の数が再び減少し、多くの小墳群が断絶するが、後期後半には集落と住居および小墳群の基礎的な単位は再び増加する。この人口増加を基点として律令国家の確立過程に入った。

前方後円(方)墳の築造パターンの変動は、これまで考えられてきたような政治史過程の直接的反映というよりも、根本的には環境変動などを起因とした人口の増減の上に立った社会関係の変化による可能性が高い。

【キーワード】古墳時代集落、首長系譜、倭王権、前方後円墳、吉備

はじめに

古墳時代の日本列島中央部に出現した政治的権威の主体を、ここでは倭王権とよぶ⁽¹⁾。この王権は、もっぱら前方後円墳を中心とする古墳の画一性ならびに分布と規模にみられる中心-周縁性および階層性から、その存在や構造が復元されている。

ただし、今のところその復元の主材料は、畿内を核に分布する前方後円墳、前方後方墳、一定規模以上の円墳と方墳といった「首長墓」と、そこに副葬された鏡などの「威信財」によるものであり、上位層の政治的側面に偏っていることは否めない。王権といえども究極的には社会の基盤をなす下位層に根ざし、そこから立ち上がった存在である以上、その歴史的な性格を真に把握するためには、下位層のあり方を反映する小古墳や集落の動態を等閑視するわけにはいかない。

本論では、「首長墓」と「威信財」を軸とした旧来の考古学による古墳時代王権論を批判的に継承しつつ、新たな理解の枠組み作りを目指す。具体的には、「首長墓」だけでなく小古墳や集落の調査成果も比較的よく揃った岡山平野を対象に、「首長墓」と小古墳との関係を明らかにし、それらを集落の動きと結びつける。このことを通じ、在地の観点、すなわち「下からの視座」ないしボトム・アップ的手法によって、倭王権の基礎構造とその歴史的変化の様態にアプローチしてみよう。なお、もう一つの論点「威信財」の再検討については、いずれ論を改めることにする。

①……………分析の視点と方法

1 これまでの古墳時代王権論を支えてきた基礎的認識

「首長墓」に基づく王権論の方法的基盤となっているのは、古墳の形態や規模を何らかの政治的秩序の反映とみなす論理である。国家的身分秩序〔西嶋1961〕、初期国家における身分の相互承認システム〔都出1991・1993〕、部族連合での序列の表示〔近藤1983〕といったように、古典理論の中で古墳時代の発展度をどう捉えるかによる表現の差異はあるが、古墳の様態の背後に政治的な秩序を読み取ろうとする点では本質的に同じである。

これらのうちもっとも近年の都出比呂志の所論-前方後円墳体制論-〔都出1991〕には、「首長墓」に基づく今日の王権論の多くが依拠している。大型前方後円墳を最上位とし、下は無墳丘の木棺や箱式石棺まで、墳形と規模という二重の基準による序列に、すべての古墳が政治的に位置づけられているという理解である。

前方後円墳体制論は、同じく都出による首長系譜論〔都出1988〕と組み合わせ、古墳時代の王権と地域の歴史の復元に用いられてきた。「首長系譜」(首長系譜・首長墓系列)とは、近接して営まれた古墳のうち一定以上の規模・内容をもつものを「首長墓」として選別し、それを年代順に配列した考古学上の作業概念であり、その地域の歴代首長が葬られた一連の墳墓と理解されている。その上で、一つの「首長系譜」上に継起する古墳の墳形と規模の変動を、「前方後円墳体制」上での地位や身分の変化とみなす。この変化が、王権との関係における政治的な盛衰を軸とした地

域史として理解され、それら地域政治史を総合することで、古墳時代の日本列島政治史が編み上げられるわけである。

「首長系譜」を営む主体と措定されているのは、古墳時代を挟んで弥生時代から飛鳥・奈良時代までの連続性をもった「地域」、ないしその歴代居住者としての「地域集団」である。この地域集団は、弥生時代には「拠点集落」として実体化する「農業共同体」の結合として現れ、古墳時代には「首長系譜」の造営主体となり、飛鳥・奈良時代にはその代わりに寺院を建立し始める。言い換えれば、水稻農耕に根ざす「農業共同体」のリーダーから、畿内に生まれた王権に連合する地域首長を経て、律令国家の官僚貴族へという、古代国家形成とともに沿って支配層が階級的に成長・成熟する連続的な過程も、そこに織り込まれていることになる。

このように、都出の所説では、首長系譜論・前方後円墳体制論・拠点集落論の三つが組み合わさって、現在の王権論の多くを下支えする古墳の理解をなしているといえよう。以下、これら三つをめぐる近年の研究状況に照らし、まずそれぞれの問題や課題を明らかにすることにより、王権論新展開への準備作業としたい。

2 首長系譜論の再検討

首長系譜論については、認識のレベルで三つの問題がある。

第一は、空間的にどの程度近接する範囲の古墳を一つの「首長系譜」とみなすかという問題である。各研究者が抽出する「首長系譜」をみると、一本の尾根上に並ぶもの、一つの水系の兩岸または片岸に連なるもの、一つの平野に散らばるものなど、その設定の空間レベルは（ときに一人の研究者の同一の論考の中でさえ）さまざまである。どこまでを一本の「首長系譜」とみなすかによって、そこに載ってくる古墳の墳形・規模やその展開は大きく異なり、復元される地域政治史も違ってきってしまう。

これと関連して第二の問題は、一つの古墳の造営基盤にどこまでの広がり（労力・資材の供給範囲）を想定するか、という点である。水系や平野を単位とした「首長系譜」の古墳の場合はそのような小地域を造営基盤とみるのが普通であろうが、近畿の「大王墓」やそれに比肩する各地の大型前方後円墳については、それが存在する小地域のみ限定した造営基盤が想定されることはあまりなく、前者と後者のあいだには一種の重層性が漠然と想定されていることになる。このような、「首長系譜」を必ずしも常に同列的にとらえず、ときに重層的な展開を想定する融通性は、さきに第一として挙げた「首長系譜」の空間的抽出の恣意性とも相互に関わった重要な問題である。

第三として、古墳はどこに築かれたのか、という問題がある。被葬者の本拠地に営まれることを鉄則視する考えから、遠く離れた政治的な進出先に造られる可能性を想定する見解まで幅広い。前者の代表は「本貫地」築造説とでもいべきものであり[白石 1999 など]、後者のわかりやすい例には「派遣将軍」説がある。両者の中間的なものとしては、被葬者の経済的な拠点や進出先、たとえばそれが主導した開発地に築かれたことを想定する説[若狭 2007] などがある。先に第二の問題とした古墳の造営基盤の広さの見積りとの関連でいうと、「本貫地」築造説は、小地域のみ造営基盤を限る説と折り合いが良い。さらに、第一とした「首長系譜」設定の空間レベルの問題との関連でいえば、それをきわめて狭く設定するやり方が、「本貫地」築造説と親和的である。

3 前方後円墳体制論をめぐる論議

前方後円墳体制論は、「古墳時代＝初期国家」説を軸とする都出の歴史理論の一翼をなす。前述のように、この論は、古墳の形態や規模を何らかの政治的秩序の反映とみなすというパラダイムの枠内にある。このパラダイムによる最初の明確な立論をなしたのは西嶋定生で、古墳の規模と形態は、中国の令制に由来して国家的身分秩序を表示するものと述べた〔西嶋1961〕。西嶋に対して古墳を国家前の所産とする説においても、それを「部族同盟」（「部族連合」）における序列の表現とみるなど、何らかの秩序の表現と考える点では根本的に変わらない。このように、古墳を秩序の表現とみる論理は、現在の古墳時代研究でかなり普遍的に共有されたパラダイムの中心をなす所説である。これについては下記の二つの問題がある。

第一に、古墳の形態と規模が、広域にわたって共有された秩序の反映であるならば、形態と規模の空間的な分布の様態は、それが共有された範囲において一貫した普遍的なパターンを示してしかるべきである。ところが実際には、特定の形態と規模の古墳がある地域にのみ密集したり、他の地域ではきわめて主要な位置を占める形態と規模の古墳がある地域ではまったくみられなかったりするなど、粗密や不均等、あるいは地域固有の展開がしばしば著しい。こうしたあり方については、広域に共有される秩序の存在を前提とした説明は困難であり、むしろ地域独自の論理（「ご近所の論理」）で古墳の形態や規模が決定されている局面を想定したほうが理解しやすい〔松木2000〕。古墳の形態と規模を決める秩序を、上からの、あるいは中央からの一元的なものとみなしてしまうことの都合の悪いリアリティとの乖離が、前方後円墳体制論を代表とするパラダイムが抱える第一の問題といえる。

第二の問題は、種々の墳形の中でも「前方後円（方）墳」に対する評価の偏重である〔松木2003〕。たとえば、小規模な前方後円（方）墳と小墳群中の盟主的な円墳との対比において後者の方が墳丘の体積や埋葬の内容において優っているにもかかわらず、「首長系譜」に組み込まれるのは前者であり、後者は中間層の墳墓として除外されることがしばしばある〔松木2000〕。このような前方後円（方）墳の偏重は、「首長墓」の選別や「首長系譜」の設定における恣意性の大きな要因をなしている。前方後円（方）墳はそれだけが単独で歴史的に存在するのではなく、北條芳隆が強調したように〔北條2000〕、小墳群の築造主体としての集団のあり方に根ざして現れるものである。前方後円（方）墳と小墳群とを地位表示秩序上での単なる格差とみなして後者を捨象するのではなく、後者が前者に根ざし、また前者が後者のあり方にも影響を与えるという構造的・連続的かつ双方向的に不可分な関係が基底にあることを考察の大前提とすべきであろう。

4 拠点集落論の問題

都出の所説では、首長系譜の造営主体として、弥生時代以来の地域集団が指定されている。それは、一つの水系に基盤を置いて水利や営農を共にする集団で、考古学的には、弥生時代の「拠点集落」〔田中1976、酒井1981〕を核とした集落群として抽出されるものである。ここでは、次の二つを問題として挙げておきたい。

第一として、「拠点集落」の実態に関し、都出が立脚した従来からの所論に対して、近年少なか

らぬ疑問が提示されている。家族を単位として結集した集団が特定の地域を占めつつ再生産を繰り返す「農業共同体」の居住地としての「拠点集落」が、①考古学的に把握可能な実体として存在するのか〔若林 2001〕、②いかなる社会組織の反映か〔田中 1998、溝口 2001〕、という問いが、表面化してきた。とくに、②の問いは、「拠点集落」も含めた集落の居住集団を、そのまま血縁を軸とする出自集団とみなすことについての疑問、と言い換えられる。1980年代の大林太良による提起〔大林 1986〕を出発点として、その後この視点を受け継いだ田中良之や溝口孝司は、一つの出自集団が複数の集落に分かれて居住する、すなわち一つの集落の成員はいくつかの出自集団から構成される、というモデルを想定し、血縁集団の累世的な居住地としての集落像を否定した。若林もまた、このモデルを参照しつつ、「拠点集落」とみえたものは、複数の集団（「基礎集団」）が時宜に応じて近接居住をした場所とみて、その歴史の実体性を疑問視した（若林前掲）。以上のような大林・田中・溝口・若林らの諸説においては、「拠点集落」は、出自集団＝血縁集団＝農業共同体の累世的拠点としての「首長系譜」の前提とはなりえない。

第二として、「拠点集落」は、かつて考えられていたほどストレートかつ安定的に継続しないことが明らかになってきた。弥生時代の中期と後期との間で集落の立地や分布に大きな変動が起こることを、西日本で岸本道昭が、東日本では安藤広道が指摘した頃から〔岸本 1995、安藤 1991〕、この点はしだいにはっきりと認識されるようになった。集落の大きな変動は弥生時代と古墳時代との間にもあり、それまでにない面的な広がりをもった大型集落が列島各地に現れて新たなネットワークを形成することを、たとえば近畿では山田隆一が示した〔山田 1994〕。奈良県纏向遺跡がこのようなネットワークの核として、「都市」〔寺澤 1998〕ともいうべき広域にわたる中枢性をもつことについても認識がほぼ共通化した。さらに古墳時代に入っても、本論で詳述するように、前期と中期との間に集落の著しい不連続が存在することが明確になりつつある〔松木 2010、古代学研究会編 2015〕。

以上のように、現在の認識では、1980年代に拠点集落論が形を整えた頃には思いもよらなかった複雑かつダイナミックな構造変動により、弥生時代から古墳時代にかけての集落や立地のパターンが幾度も覆えられては再編されるかのような状況が、実態として明らかになっている。このような中で、弥生時代から古代まで静的かつ累積的に継続し、古墳時代においては「首長系譜」の一貫した担い手となるような主体は、少なくとも空間的な考古事象として認識可能な実体としては、これを把握することができないわけである。

このことと関連して第三に、古墳を築く集団形成の基礎となる人間の集まり（ポピュレーション）そのものが、さまざまな空間レベルにおいて、かつて認識されなかったほど動的な性質をもつものと考えられるようになってきた。たとえば集落レベルにおいては、それを1出自集団の居住単位とみてきた従来の枠組みを排し、複数出自集団の居住の場とする大林－田中－溝口説がその代表である。とりわけ溝口は、このような集落の盛衰は、その地理的条件、経済的情勢、リーダーの力量あるいはときに偶発性による成功度に基づくものであり、成功度の高い集落に利得を求めて人口が流入（あるいは成功度が低下して人口が流出）するような動態を、社会変化の重要な一側面として措定する〔溝口 2001〕。また、地域レベルにおいては、弥生時代の後半から古墳時代の初頭にかけて東海各地から関東各地へと多数の人口が流入した形跡が認められることから「難民」を想定する

赤塚次郎のような見解〔赤塚1992〕も提示されている。もとより、古くから弥生時代開始期や古墳時代などについて行われてきた「渡来人」関係諸説も、「渡来」という概念がそもそも根ざす一国的史観の枠内にとどまり、「渡来」される内的領域主体としての日本を先験的に措定しているという桎梏から脱していない弱みをもちつつも、盛んに検討されて一定の成果をあげてきた。今後は、さまざまなレベルの人口の流動を、現代の国家的枠組みやそこに発する領域主義から最大限に独立させて相対化した上での歴史叙述と、それに基づいた古墳論の再構築が必要であろう。静から動へのパラダイム転換が期待される。

5 本論の視点と方法

以上では、これまでの王権論の軸となってきた首長系譜論・前方後円墳体制論・拠点集落論について、それを批判的に継承しつつ新たな歴史叙述の枠組みを作っていくために、それぞれが現状で直面している問題と課題をあげてみた。それを整理しつつ、新しい王権論を見すえて、本論での作業を端緒として進めるべき研究の方向性を、下記のように定めたい。

まず、現行の首長系譜論と関わる古墳造営主体のとらえ方としては、①古墳の造営主体、あるいはそれを体现する地域ないし空間を、可變的、かつ場合によっては多層的にとらえる。②そのような地域ないし空間と、個々の古墳の立地との関係についても、できる限り柔軟に想定する。③古墳の時空的展開を考える際に、それに伴う集落の動きを必ず参照して関連づける。古墳と集落の双方の変動を関連させる理解は、すでに北部九州で杉井健〔杉井2001〕が、東北で菊地芳朗〔菊地2001〕が試みているが、網羅的・量的分析を導入することによってそのような作業を前進させたい。

次に、前方後円墳体制を代表とする〈古墳＝秩序表示〉論に対しては、①古墳の意味自体が時間的・空間的に可變的で多様、かつ多義的であった可能性〔松木2000〕を、あらためて最大限に評価し、歴史的文脈に沿った古墳の墳形と規模の解釈を目指す。さらに、〈古墳＝秩序表示〉論を超越するためには、その最たる認識バイアスを作り出している前方後円（方）墳偏重主義を見直し、さまざまな墳形と規模をもったすべての古墳を構造的に把握する視点〔和田1994、なお、都出の前方後円墳体制論も、大きくみれば、もとよりそのような構造的把握を目ざしたものである〕をもつ。すなわち、②特定の空間範囲と時間幅の中で築かれた、小古墳も含むすべての古墳が作り出す構造の中で前方後円（方）墳を相対化する。

最後に、拠点集落論に対しては、先述のように集落の動きを綿密に跡づけるほか、①そこに集う、あるいはそれらを点として広く展開する人口を、時間的にも空間的にも可塑的かつ流動的なものとして復元・把握する。すなわち、古墳造営の主体を、継続的に定着した人間集団ではなく、状況に応じて定着・流動あるいは結集・拡散する一つのポピュレーション（人の集まり）として理解する。そして、将来的な課題となるが、②その定着・流動および結集・拡散の主要な一動因として、気候〔中塚2010〕を主とし、それと関連する地理的条件〔大庭2014〕も含み込んだ環境の変動ならびに安定のプロセスを念頭に置く。

以上の視点と方法論に沿って、次章では、筆者がフィールドとしてきた岡山平野を対象に、小古墳も含めた古墳全体と、それを営んだ集落を包括的にとらえ、その細かい動きを跡づけていこう。

②……………岡山平野における古墳と集落の動向

1 地域の設定

岡山平野は、瀬戸内海に流れ込む吉井川・旭川・高梁川の「岡山3大河川」と、それらの間を流れる砂川（赤磐砂川）・笹が瀬川・砂川（一宮砂川）・足守川などの中小河川の扇状地状三角州が連接した、東西約30kmの沖積地である。中世以降の干拓によって南に大きく拡張されたが、もとの海岸線は現在よりも北方に入り込み、南面には「吉備穴海」とよばれる入江が、現在は陸続きとなっている児島との間に入り込んでいた。つまり、古墳時代の岡山平野は、瀬戸内海のそのまた内海という波静かな海面に、中国山地の奥深くに発して豊富な水量をもつ河川群が流入するという、生産や交通の上で好条件が揃った地域であった。

東西に接続して全体として岡山平野を構成するそれぞれの扇状地状三角州の上には、源を分け合う流れが分岐しつつ展開し、一つの「水利面」ともいべき広がりを作っている。この水利面の上に分布する諸集落ないし諸集団は、生産に必要な水利を共有しているので、そのことを巡って相互に日常的に関与し合う、農耕社会固有の空間的な社会関係を作っていたと考えられる。地形から判断しうるこのような水利面の広がりを手掛かりに、本論では岡山平野を7つの小地域に分けて分析を進めたい。7つの小地域を東から列挙すると、次の通りである。

- A) **吉井川・赤磐砂川下流域** 大河川の吉井川と、その西側に河口部を並べる赤磐砂川が形成した扇状地状三角州上の水利面である。集落や墳墓の調査例が希薄であるために、それらの動態を量的に把握することが難しいが、古墳時代初頭において岡山平野最大の前方後円墳・浦間茶臼山古墳が存在するという重要性ゆえに、検討対象地域に加える。
- B) **赤磐砂川中流域** 赤磐砂川中流域の水利面である。対象7地域のうちここだけが盆地状であるが、弥生時代には丘陵性の集落が発達し、古墳時代以降も墳墓の営みが続いた。古墳時代中期には「吉備3大巨墳」の一つである両宮山古墳が築かれ、古代には備前国分寺が造営されるなど、吉備の政治的中枢の一つとなった。
- C) **旭川下流域東側** 大河川の旭川が形成した広大な扇状地状三角州は、地形的にも、また集落や墳墓の展開をみても、現在の本流を境に東西に分けられる。このうち東側は、百間川遺跡群を中心とする集落や耕地が弥生時代に展開し、古代には備前国府が置かれるなど、吉備の主要な地域の一つである。
- D) **旭川下流域西側** 旭川の扇状地状三角州の西側で、現在は岡山市街地の中心部となっている。弥生時代には早くから開発され、津島遺跡や南方遺跡などの集落が繁栄した。
- E) **笹が瀬川・一宮砂川下流域** 二つの中小河川が河口部を寄せ合って形成した、比較的狭い三角州である。調査例も希薄であるが、C・Dと次のF・Gという二つの主要地域の橋渡しの位置にある地域として検討対象域に含める。
- F) **足守川下流域** 中小河川の足守川が形成した扇状地状三角州で、弥生時代には足守川加茂・津寺などの集落や榎築などの弥生墳丘墓が集中的に造られ、古墳時代中期には岡山平野最大、

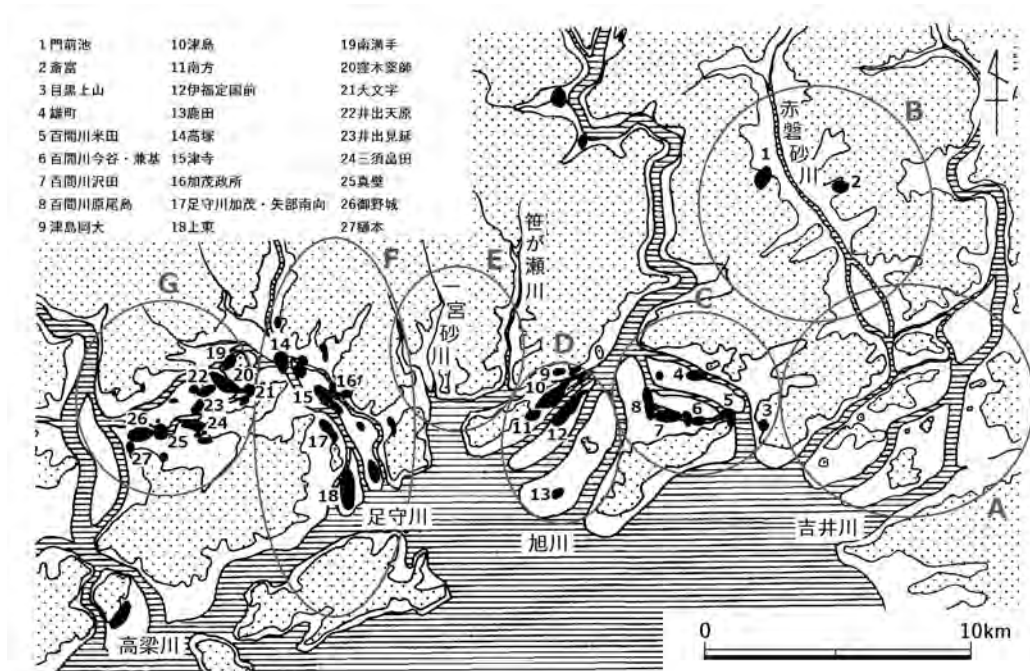


図1 岡山平野の古墳時代集落と地域区分

全国でも第4位の墳丘規模をもった造山古墳が築造されるなど、吉備随一の中枢域をなした。

G) 高梁川下流域 大河川の高梁川が河口に出る手前、主として東岸方向に広がった扇状地状三角州である。東端には足守川が流入し、その流れを加えてFの足守川下流域へと流れ下る。したがって、FとGとは実際には一連の水利面である。地形的には丘陵を間に挟んで境界は比較的分明であるので二つに分けたが、同じ水利面上に上流・下流で直列するというF・Gの関係は、並列の関係にあるC・Dのそれよりも深かったものと考えられよう。Gの地域は、古墳時代中期に造山古墳に次ぐ規模をもった作山古墳が築かれ、後期に巨石墳のこうもり塚古墳などが営まれた後、古代には備中国府・国分寺が置かれるなど、政治的な中枢となった。

これら7地域のほか、Gの西側に当たる小田川流域・新本川流域も、墳墓の展開などからみて重要な地域である。縁辺部に当たること、調査例が少ないために集落や墳墓の動態を量的に把握しにくいことから、分析対象からは外すが、関連する墳墓などを必要に応じて補助的に参照する。

2 時期区分

岡山平野の集落や住居の時期比定に用いられてきた土器編年〔柳瀬・伊藤1970〕と、副葬品や埴輪の変化を軸とした古墳編年のうち『前方後円墳集成』で用いられた編年案〔いわゆる「集成編年」、広瀬1991〕とを総合し、次のような時期区分を設ける。もとより両者には方法や精度の違いがあり、双方の接点となる須恵器は古墳時代でも後半に限られるゆえに細部までの照合は難しいため、本論で目指す歴史叙述に十分な程度の細かさにとどめざるをえない。

弥生時代末・古墳時代前期初頭…下田所式併行期, 「集成編年」1 期初頭およびその直前
 古墳時代前期前半…亀川上層式併行期, 「集成編年」1 期の大部分および2 期
 古墳時代前期後半…「集成編年」3・4 期
 古墳時代中期前葉～中葉…初期須恵器出現前後～須恵器様式 TK208 併行期, 「集成編年」5～
 7 期
 古墳時代中期後葉…須恵器様式 TK23・TK47 併行期, 「集成編年」8 期
 古墳時代後期前半…須恵器様式 MT15・TK10 併行期, 「集成編年」9 期
 古墳時代後期後半…須恵器様式 TK43・TK209 併行期, 「集成編年」10 期
 古墳時代終末期…須恵器様式 TK217 併行期

なお、それぞれの実年代と年代幅は、本論の論述において各時期の住居数と人口を問題とするので重要である。今後さらに詳細な検討を進めていく必要があるが、現時点での大まかな推算の中心値を示しておく、弥生時代末・古墳時代初頭が200–250年(50年間)、古墳時代前期前半が250–325年(75年間)、古墳時代前期後半が325–375年(50年間)、古墳時代中期前葉～中葉が375–475年(100年間)、古墳時代中期後葉が475–500年(25年間)、古墳時代後期前半が500–550年(50年間)、古墳時代後期後半が500–600年(50年間)、古墳時代終末期が600–650年(50年間)と考えておく。これらの実年代は鈴木一有氏による中期古墳の年代観〔鈴木2014〕に基づく。なお、古墳時代中期前葉～中葉をひとまとめとしたのは、当該時期の土器編年の詳細が未確立のため集落遺跡では分期が困難であるためのやむをえない措置である。

以上をもとに、さきに提示した7つの地域でそれぞれに生じた墳墓の展開と、それを営んだとみられる集落の動態を、両者の空間的な関係の復元を意識しつつ、詳細にたどってみたい。

3 弥生時代末・古墳時代前期初頭における個別区画墓群の成立

個別区画墓群の出現 = 造墓原理の転換 = 古墳の成立 古墳の出現という歴史事象は、これまで主として、飛躍性と斉一性をもって定型化した前方後円墳の成立〔都出1981, 近藤1983〕を画期として理解されてきた。これに対して筆者は、本論で提示した「小古墳も含むすべての古墳が作り出す構造」の全体を問題とする姿勢から、集塊状ないし集群状態の共同墓地(集団墓)が、方形を基調とする低平な小墳丘を個別にもった区画墓へと分節化するという、造墓原理の転換を重視した〔松木2002〕。その上で、この造墓原理の転換を導いた要因を、弥生から古墳へと時代を動かした社会の構造変化とみて、その背景に、鉄などの物資を軸とする広域流通経済と、それに伴う人口の流動化がもたらした旧来の共同体的な社会関係の解体と地縁的再編の動きを想定した〔松木2011〕。

このような拙論には批判も予測されるが、弥生時代の後期後半頃から古墳時代初頭にかけての時期に、集塊状の共同墓地が衰滅したり、一つの墳丘墓に含まれる埋葬の数が1～数基に絞られたりして、個人またはきわめて少人数を個別に区画した小墳－個別区画墓－が成立してくる事実そのものは、九州〔溝口孝司のいう「区画墓Ⅲ」, 溝口2000〕, 山陰〔池淵2007〕, 近畿〔岩松1992〕など、列島の広い範囲の各地で指摘されている〔会下2015〕。この動きと、これまで重視されてきた前方後円墳の発生と定型化とがいかなる関係をもって進んだのかを詳細に明らかにすることが、古墳出現、ならびに弥生時代から古墳時代への移行についての理解を、理念先行から実態把握へと発展させる

ための喫緊の課題といえよう。

上記の私案を古墳出現論に寄せて具体的に言い表すなら、筆者は古墳の出現を、

① 個別区画墓群の成立、すなわち、社会の基底からの動きとして進んだ造墓の分節化

② 前方後円（方）墳の成立と普及、すなわち、政治的な動きとして進んだ墳墓の序列化

という、二つの別個のプロセスとして考えている。「前方後円墳体制」論に引きつけていえば、都出の概念図に示された墳墓の序列のうち小方墳や小円墳は、上記①のプロセスを経て、多くの地域では「早いところでは弥生時代後期後半から：溝口2000」、前方後円（方）墳の出現以前に先行してすでに存在するものであるから、大型前方後円墳を頂点とする序列の伝播によって「上から」各地にもたらされたものではないことは明らかである。「上から」各地にもたらされたのは、小方墳群や小円墳群を除いた前方後円（方）墳を主体とする部分であって、本論では、この部分のみをカギカッコ付きで「前方後円墳体制」と仮称しておきたい。

「前方後円墳体制」の形成過程、すなわち②のプロセスがいつどこで発生したのかという問題については、箸墓古墳に具現化される「定型化した前方後円墳」の成立に極限させる説〔近藤1977〕と、それに一部先立つ「纏向型前方後円墳」の発達にそれを見て取る説〔寺澤1988〕が代表的で、いずれも発生地としては畿内を想定する。しかし、②のプロセスを特徴づける突出部または前方部の付加と拡大の過程は、関東南部〔田中1976、赤塚1992など〕や四国東部〔菅原1983〕などでもそれぞれに確認されていることから、②のプロセスは畿内以外の地域で発生したか、あるいは畿内も含めて多元的に発生・伝播した可能性も考えていかなければならない。そして、その次の段階として、それらの動きをさらに徹底強化した「纏向型前方後円墳」や「定型化した前方後円墳」およびその序列の形成が、二次的な動きとして畿内を中心に3世紀中葉以降進展し、他地域に伝わったとみるべきであろう。

ただし、本論で対象とする岡山平野は、①のプロセスは周辺の諸地域とともに弥生時代末～古墳時代初頭に生じたのに対し、②のプロセスは「自生」せず、①のプロセスの直後に畿内から伝播して①に被さる形となった地域である。①のプロセスに②のプロセスがどのように重なってくるのか、以下では個別区画の小墳群と前方後円（方）墳との関係をつぶさにとらえながら、その変化を跡づけてみたい。

なお、小墳群を重視した古墳の分析は、岡山平野ではすでに積み重ねがある。その早い例は出宮徳尚によるもので、岡山平野の古墳時代前半の小墳群の分布を調べ、地域ごとの展開状況から、大古墳による政治過程の復元とはあえて異なった視座から地域社会の編成の過程を追おうとした〔出宮1991〕。このような視点を受け継いだ草原孝典は、小墳群が地域社会の基層であることを踏まえた上で、前方後円墳を中小のものと大型のものに区分して秩序を見出し、両者の関係の展開をたどることによって岡山平野諸地域の政治的・社会的過程の復元を試みた〔草原2009、2014a、2014b〕。以下では小墳群・前方後円（方）墳と集落との空間的な関係をさらにつぶさに追求し、後者の変動と前者の展開との有機的な関係を見つけ出すことによって、両者の研究を深化させることを目指す。

各地域における個別区画の小墳群の出現 まず、上記①のプロセスを地域ごとに明らかにすることから始めたい。個別区画の小墳群（以下、単に「小墳群」と呼ぶが、本論でこの呼称を用い

るときには、つねに上記したような造墓原理の転換を経て「分節化」した墓群であることを意味する)が岡山平野において出現するのは、何度も繰り返すように、弥生時代末～古墳時代初頭である[松木 2002]。小地域ごとにその状況をみてみると、B・D・F・Gの諸地域で事例が確認できる。Bの赤磐砂川中流域では、高月丘陵上に営まれた便木山・四辻などの集塊状態(形成初期は散開状態)の共同墓地が弥生時代末前後に廃絶したのち、同じ丘陵上に小墳群が現れる。弥生時代末～古墳時代前期初頭に確実に属するものとして、一辺 9.5m の方墳であるさくら山「台状墓」が知られている。

Dの旭川下流域西岸では、北側の半田山山塊から平野に向けて延びる尾根上に、七つ坩・清水谷など、集塊状態の木棺墓群からなる弥生時代の共同墓地がみられる。その後、七つ坩の同じ尾根上に個別区画の小墳群が現れる。この小墳群は、精確な成立時期はまだ不明確だが、次の段階である古墳時代前期前半には前方後方墳や円墳を含むようになる。尾根続きの近隣には、いま述べたBのさくら山と似た性格の方墳である都月坂 2号があり、続いて前期前半以降、前方後方墳や前方後円墳を含む小墳群が出てくる。

集塊状態の共同墓地から個別区画墓群への展開がもっとも詳しくたどれるのは、Fの足守川下流域である。集落域を西から見下ろす丘陵上に、集塊(ところによっては散開)状態の共同墓地である甫崎天神山が弥生時代後期前半から営まれているが、これが弥生時代末～古墳時代前期初頭の間に廃絶し、小墳群が現れる。同時にすぐ近くに、同じく小墳群である郷境墳墓群が出現する。甫崎天神山・郷境の小墳群は、長辺が 16m と少し大きい郷境 3号を除けば、一辺 10m 内外の小規模な方墳を連ねて次の古墳時代前期前半まで続く。古墳時代前期前半には、矢部・黒住などの小墳群も加わり、前者に接した位置には前方後円(方)墳が現れる。

Gの高梁川下流域では、南西端の三輪丘陵の一角をなす宮山に、弥生時代末～古墳時代初頭の散開状態の共同墓地があり、その中に 1基だけ、中心埋葬として堅穴式石室をもつ前方後円墳(墳丘長 30m, 以下、古墳名の後のカッコ内「数字m」は墳丘長を表す)が築かれている。ここが他の一般的な事例と異なるのは、共同墓地が小墳群に分節化するよりも前に、共同墓地の中に前方後円墳が現れる点である。同じ丘陵上の殿山が、弥生時代末～古墳時代初頭からの小墳群と考えられてきたが[平井 1982, 北條 2000], 副葬品の内容からみて、その成立は前期後半以降に降る可能性がある⁽²⁾。

4 小墳群と前方後円(方)墳の関係

宮山の前方後円墳は、岡山平野ではもっとも古い段階に属する。同じ最古段階に属するもう 1例は、Eの笹が瀬川・一宮砂川下流域とFの足守川下流域との境界をなす吉備中山山塊の高い尾根上に築かれた矢藤治山の前方後円墳(35.5m)で、近隣には集塊状態の共同墓地や個別区画の小墳群は確認されておらず、遠く独立して営まれている。つまり、前方後円(方)墳は、出現の当初から、共同墓地や小墳群とのさまざまな空間的・構造的関係をもちながら出現しており、倭王権の構造を墳墓の在り方から解明していく限りにおいてその点の追求はきわめて大切である旨は、本論の主眼として先に宣言した通りである。そこで、このような前方後円(方)墳と共同墓地および小墳群との関係をさらに詳しくみるために、前方後円(方)墳がいちだんと増加する次の古墳時代前期前半も含めて、地域ごとの展開をうかがってみよう。

各地域の前方後円(方)墳 まず Aの吉井川・赤磐砂川下流域では、初期古墳としては岡山平

野最大規模、同年代に置かれる奈良県箸墓古墳の「2分の1相似墳」〔北條1985〕といわれる浦間茶臼山古墳（138m）が築かれている。また、近隣の尾根上には一日市古墳（57m）があり、前期前半の前方後円墳とされる〔小郷ほか1997〕。これらの前方後円墳を望める場所には、浦間・浅川・楯原・矢井などの小墳群が知られているが、うち浅川3号墳が前期後半に降ると確かめられているだけで、浦間茶臼山・一日市の築造年代にすでに始まっていたかどうかは明らかでない。始まっていたとすれば、この大型および中型の初期前方後円墳2基は、複数の小墳群からは近くに眺められつつ分離した、半独立的な立地を占めたことになる。始まっていなければ、完全に独立した位置といえる。

Bの赤磐砂川中流域には、現状では前期前半に遡ることが確実な前方後円墳や前方後方墳の例はない。Cの旭川下流域東側は、古墳に先立つ共同墓地の存在が明確でないが（注2）、前期前半には多数の前方後円（方）墳が築かれている。まず、北側の竜ノ口山山塊の高い尾根上には前方後方墳の備前車塚（墳丘長48m）があり、墳丘は小規模ながら、後方部の竪穴式石室から13枚の鏡を中心として質量ともに著しく際立った副葬品が出土した。近くに小墳群はなく、完全に独立した立地である。かたや南側の操山山塊の西端部には、操山109号（76m）・網浜茶臼山（92m）の2基の中規模前方後円墳が築かれるが、これも近くに同時期の小墳群は知られておらず、独立性の高い立地とみられる。

Dの旭川下流域西側にも、前期前半の前方後円（方）墳が多い。北側の半田山山塊では、先述のように、七つ坩古墳群の中に小型の前方後方墳である1号墳（45m）、超小型の前方後方墳である5号墳（25m）が現れ、3号・7号という円墳が混じる。小墳群の一員であり、独立性は低い。七つ坩古墳群は、先述したB地域の用木古墳群と同様、前方後方（円）墳や円墳を交える「有力」な小墳群と位置づけられる。近くの尾根上に連なる都月坂古墳群も、前方後方墳の1号墳（33m）という小型で独立性の低い前方後円（方）墳を交え、七つ坩と同様の性格をみせる⁽³⁾。

Eの笹が瀬川・一宮砂川流域には、三角縁神獸鏡をもつ前方後円墳の一宮天神山古墳（60m以上）があるが、その他の小墳群の状況が定かでないので、ここでは検討から外さざるを得ない。

Fの足守川下流域では、先に述べたように、弥生時代末～古墳時代前期初頭には縁辺の丘陵上に矢藤治山の前方後円墳が独立して現れるが、これに引き続いて古墳時代前期前半には、背後の山頂部に大型の中山茶臼山古墳（120m）が、やはり高度な独立性を保って出現する。そのいっぽう、集落を直下に見下ろす地域中心部の丘陵上では、中型の前方後円墳である矢部大坩古墳（50m）が小墳群の矢部古墳群に接して築かれ、黒住の小墳群中にある小型前方後方墳の黒住1号墳（29m）もこの時期に属する可能性が高い。また、同じく小型前方後方墳の南坂8号墳（27m）も、南坂の小墳群に交じって営まれている。矢部大坩・南坂1号の両者は独立性の低い事例に属する。

Gの高梁川下流域では、今のところ確実に前期前半に遡る前方後円墳は知られていない。

前方後円（方）墳出現の3パターン 以上、A～Gの諸地域を通じて、共同墓地から個別区画の小墳群へと分節化する一般的な造墓活動の中に、前方後円（方）墳がどのように出現し、展開するかをみてきた。その結果、前方後円（方）墳の現れ方には、i）小墳群の一員として出現（初期には、G地域の宮山のように、まだ小墳群に分節化しない共同墓地の中にも出現する例も稀ながらある）、ii）いくつかの小墳群を束ねるような位置に出現、iii）小墳群から離れた位置に独立して出現、

という3パターンが認められた[松木2010]。これら3パターンと墳形・規模(墳丘長)との関係を見ると、次のようになる。

- i) 七つ坑1号(D・前方後方45), 七つ坑5号(D・前方後方25), 都月坂1号(D・前方後方33), 黒住1号(F・前方後方29), 南坂8号(F・前方後方27), 宮山(G・前方後円30)
- ii) 宍甘山王山(C・前方後円墳68.5), 矢部大坑(F・前方後円50)
- iii) 浦間茶臼山(A・前方後円138), 一日市(A・前方後円57), 備前車塚(C・前方後方48), 操山109号(C・前方後円76), 網浜茶臼山(C・前方後円・92), 矢藤治山(F・前方後円35.5), 中山茶臼山(F・前方後円120)

こう並べてみると、iは小規模で、かつ前方後方墳が過半を占め、iiiは大規模で、かつ前方後円墳が主体になるという傾向が明らかとなる。当地域の前方後円墳と前方後方墳との間に規模の差を見出した宇垣匡雅の指摘[宇垣1992]が改めて追認される。iiiのうち、48mの前方後方墳である備前車塚と、前方後円墳ながら35.5mと小さい矢藤治山は例外にみえるが、前者は先述のように群を抜いた副葬内容をもつ点から墳丘規模以上の卓越性を想定すべきであるし、後者は前方後円墳のまさに出現期という時代性を考慮する必要がある。

5 前期における古墳築造活動の全体構造

前方後円(方)墳の出現パターンと規模の関係 以上の傾向が確かであることを追認するために、続く前期後半の諸例も同じパターンに分類し、その墳形と規模をみてみたい。ただし、小墳群との関係が明らかでないものは除外する。また、下記の諸例の中には、今後の調査が進めば前期前半に遡る可能性をもつものが含まれている。

- i) 北ノ房(A・前方後円25), 用木3号(B・前方後方42), 吉原6号(B・前方後円40), 黒住13号(F・前方後方30), 上土田1号(F・前方後方26.5), 上土田4号(F・前方後方27), 大崎西1号(F・前方後方30), 大崎西2号(F・前方後方26.6), 兎登木8号(井山, G・前方後円50)
- ii) 天望台(G・前方後円50), 三笠山(G・前方後円70)
- iii) 尾上車山(E・前方後円135)

このように、3パターンと墳形・規模との関係は、前期の後半になっても、前半と変わらない。前半から後半を通してiiの事例が比較的少ないのは、古墳群が乗る一つの丘陵の全体が詳しく調査された事例に乏しいことと関わりがあろう。本論の検討対象からは外れるが、高梁川を挟んでG地域の対岸に当たる総社市秦の一丁坑古墳群では、近年の調査で、丘陵尾根上に幾筋かの方墳からなる前期の小墳群が広がり、それを束ねるような山頂部に前期後半の前方後方墳である1号墳(70m)が、少し離れた尾根上に前期前半の前方後方墳である茶臼嶽古墳(65m)が築かれていることが判明した。パターンiiの好例であり、調査や踏査が進めば、同じような類例は増加する可能性が高い。

なお、小墳群の基調となるような方墳の一つが、周囲のものより大型化した例が、パターンiiの位置を占める場合がある。前期にはF地域の犬崎2号や妙立山裏山2号などが典型例であり、葛原克人がかつて指摘したように、中期前半にかけて各地域でみられる[葛原1991]。出雲東部で顕

著のようにさらに大型化して i の位置を占めるほどになるまでには至らないが、岡山平野における王権の構造を古墳の相互関係から復元していく上では重要である。

地域と「前方後円墳体制」 さて、弥生時代末～古墳時代初頭から古墳時代前期後半にかけて、岡山平野の各地域でみられる以上のような状況は、どのような歴史事象として解釈されようか。小墳群のあり方も含め、いま一度、以下に事実を確かめておこう。

- 一、弥生時代末～古墳時代初頭に、それまで続いてきた集塊状態（形成初期は散開状態）の共同墓地が、小墳群に分節化する。小墳群は、各地域において、集落の広がる平地を見下ろす丘陵上に幾筋も形成され、前期の前半から後半に及ぶ。小墳群の墳丘は方墳を基調とする。
- 二、それらの小墳群は、群どうしが等質ではなく、個々の墳丘規模に表現されるような格差がある。すなわち、一辺が10m程度の小型の方墳を基調とするものと、15m前後のやや大きい方墳を基調とするものがある。
- 三、後者のような優勢な小墳群の一部に、群を構成する一員として、小型の前方後方墳（稀に前方後円墳）が現れる（上記のパターン i）。また同時に、複数の小墳群を代表するかのような位置に中型の前方後円墳や前方後方墳（時に大型の方墳）が営まれる場合がある（上記のパターン ii）。さらに同時に、小墳群から離れて独立した場所に、主として中型や大型の前方後円墳が築かれることがある（上記のパターン iii）。
- 四、一方で、前方後円（方）墳を、群内や近隣、あるいは周辺にもたないまま続く小墳群も数多く存在した。

小墳群と前方後円（方）墳の関係を軸に、以上の状況をさらに整理すると、古墳時代の墳墓－古墳－のもっとも基本的な単位が小墳群であり〔北條2000〕、古墳時代が墳墓の営みを社会的関係の軸とする社会であったと理解する限り、その小墳群を何世代かにわたって営んだグループ、すなわち「造墓単位」の担い手こそが、古墳時代の基本的な社会単位としての造墓単位集団とみなされるべきである。つまり、「首長系譜」とは、前章で批判したように、「前方後円（方）墳ないし大型の円墳や方墳が一定の空間の中で時間的に連続して築かれる現象」を論者ごとに相当の恣意性をもって析出した作業用の理念であり、資料の実態に即した歴史事象である造墓単位集団とは次元の異なる概念である。したがって、これからなすべきことは、むしろ造墓単位集団を観察する中から、「首長系譜」として理念化されたような現象の有無や実態を実証的に見つけ出す作業が主眼となる。それを軸に上記一～四の事実を歴史事象に解釈して叙述しなおすと、

- 一、弥生時代末～古墳時代初頭に、各地域で造墓単位集団が顕在化した。
- 二、造墓単位集団の相互間には、一定の優劣があった。
- 三、共通の墳墓儀礼をもちつつその規模や内容でメンバーの立場や地位を表示するシステム（＝「前方後円墳体制」）が近畿から伝わった。このとき、i）有力な造墓単位集団は集団を代表してそこへ参画する人物を出す（逆に、参画者を出したために有力化した可能性もある）、ii）いくつかの造墓単位集団を代表してそこに参画する人物がいたり、iii）さらに広い範囲の多数の造墓単位集団を代表してそこに参画する人物がいたり（iii-a）、あるいは在地の造墓単位集団からは超越ないしは遊離した立場でそこに参画する人物がいたり（iii-b）、在地社会との関係や距離はまちまちであった。

ただし、先にみたように、墳丘の規模は、i → ii → iiiの順、すなわち代表する範囲が広がるほど大きくなる傾向が明らかなので、在地社会のより高位の、ないしはそこから距離を置いた代表者ほど「前方後円墳体制」内での高い位置づけを得がちであったと推測することができる。すなわち、前方後円（方）墳の規模の大小は、岡山平野の場合、被葬者の在地社会での立場を反映する場合が多かったと考えられる。

なお、iiのパターンにおさまる位置に、前方後円（方）墳ではなく大型の方墳が築かれる事例について先に触れたが、これは「前方後円墳体制」には参画しない広範囲の代表者が、出雲東部ほど顕著ではないにせよ在地での地位を表示する場合〔松木2017〕が、岡山平野においても一定程度あったことを示していよう。

四、いっぽうで、「前方後円墳体制」に参画しない造墓単位集団や地域も少なくなく、その浸透度・受容程度には空間的なムラがあった。

このように、岡山平野では、「前方後円墳体制」という墳墓築造のシステムが、造墓単位集団の展開に反映される在地社会の秩序にほぼ整合する形で取り入れられ、古墳時代前期後半まで継続した。このことと「首長系譜」との関係を検討する前に、造墓単位集団が、集落遺跡においてはどのように見出されるのかを検討しておきたい。

集落との関係 造墓単位集団が営んだ小墳群は、各地域において、集落の広がる河川沿いの平野を取り巻く山塊や丘陵に展開する。個々の集落と小墳群が、地理的にそれぞれ1対1で対応するような単純な様相ではない。そのことを確かめるべく、集落群と小墳群とがもっともよく調査されているFの足守川流域を例に、さらに詳しい実態をみてみよう。

この地域の集落が群をなして広がる面は、足守川本流と支流の血吸川・砂川（総社砂川）、およびGの高梁川下流域から流入してくる前川といった各河川の流路が集まる付近を北西端とし、これらの流路が合わさってほぼ一本となった足守川が、現在よりもはるかに北側に海岸線を侵入させていた瀬戸内海に注ぐところを南東端とする、南北約6km・幅約1.5～2kmの範囲である。その中で、弥生時代末～古墳時代初頭から古墳時代前期後半に至るこの時期に、もっとも多数の住居を有した集落が集中する箇所は二つあって、一つは北西端近くの高塚遺跡の周辺一帯、もう一つがやや下流寄りの津寺遺跡とそれに南接する足守川加茂遺跡の一帯である。ここでは前者を北地区、後者を南地区と仮称しておきたい。北地区ではこれまでに高塚で19棟、その北東の高松城下層で1棟の住居が、弥生時代末～古墳時代初頭から古墳時代前期前半までの間に確認されている。一方の南地区では、同じ時間幅の間に津寺遺跡で284棟のほか、足守川加茂で113棟、加茂政所で34棟など、全部で450棟ほどの住居がこれまでの発掘調査で確認されており⁽⁴⁾、ここが地域の集住の中心だったことがうかがえる。その他、地域最南端で海岸に面する上東遺跡などでも、この時期の少数の住居が発見されている。

このように南地区を中心としてこの平野に居住していた人々が、周囲の丘陵尾根上に幾筋もの小墳群を営んだ各造墓単位集団の主体者だったことは疑いない。具体的にいえば、南地区を西側から見下ろす日差山丘陵上の郷境（弥生時代末～古墳時代初頭および古墳時代前期前半）、矢部（同）、甫崎天神山（古墳時代前期前半）、黒住（古墳時代前期）などに多数展開する幾筋もの各小墳群を営んだ各造墓単位集団の主たる居住地が、津寺・足守川加茂など南地区の諸集落であったことは確

実であろう。いっぽう、高塚や高松城下層がある北地区を中心に居住していた各造墓単位集団は、その位置からみて北側の丘陵上に展開する大崎・大崎西などの幾筋かの小墳群を営んだと考えられる。

各造墓単位集団が営んだ小墳群とその居住地との空間的關係は、いまみたように、後者が地域の中心にまとまり、前者がその周囲に散開するという「放射状」のように描ける。したがって、個々の造墓単位集団の居住地（集落）と墓域（小墳群）とが、それぞれ空間的・地理的にのおの独立して1対1の關係になっているわけではない。

そうであるとすれば、一つの造墓単位集団に埋葬される集団は、集落や集落群での居住形態にどのように表れているのであろうか。津寺遺跡では、多数の住居（竪穴建物）群が、空間上いくつかの小群に分かれることが指摘される〔亀山1997・1998〕。また、これらの群が、津寺のような中心的な集落から少し離れ、単独で一つの小集落を形成する場合も想定できる。こうした小群のような1居住単位を、1小墳群を営んだ1造墓単位集団の実体とみなすことは可能であろう。かたや、大林・田中・溝口らが最初に想定してきたように、そのような居住単位を横切った形で出自に基づくソダリティが別に存在し、それが造墓単位集団の実体である可能性もまた捨てきれない。そのいずれであるかを遺構に即して実証することはきわめて難しからう。

ただ、いずれであっても、平野の集落で生業や暮らしを共にしている人々の間に何らかの分節の単位があり、その単位がおの別々に造墓を営んでいることは、岡山平野の場合ほぼ明確といえる。逆に言い換えれば、小墳群をそれぞれに営む複数の造墓単位集団が、日常は同じところにまとまって共生・協業しているような実態が復元できる。

造墓単位集団の正体を、さらに踏み込んで追究するには、小墳そのものの被葬者の分析が鍵となる。一つの小墳の埋葬数は1基ないし3～4基が普通であるが、現在提出されている仮説としては、形質人類学上の仮説も踏まえてこれを個人ないしキョウダイ（siblings）とみなす見解である〔田中1995〕。他に有力な対案や矛盾は見当たらず、現状ではこれが妥当であろう。そうであるとすれば、小墳群を営んだ造墓単位集団の軸は出自であり、相互に血縁の關係にある複数の個人たちまたはキョウダイたちが、ほぼ同世代ないしは数世代の時間幅の中で相互に小墳を寄せ合って営んだ痕跡であると理解できる。

古墳と集落の展開 以上のことを念頭に置いて、Fの足守川下流域を実例に、集落、小墳群、前方後円（方）墳の3者がどのように絡み合いつつ展開したかをあとづけてみよう。

まず、共同墓地が個別区画の小墳群へと分節化するという列島規模の変動が、弥生時代末～古墳時代初頭頃に岡山平野にも及び、足守川流域に住んでいた人々も、いま推測したように出自に沿って、それぞれ小墳群を営み始めた。とくに人口が集中した南地区では、多数の単位が西側の丘陵上に幾筋もの小墳群を営んだ。単位間には、小墳群を構成する墳丘の規模の差として表れる緩い優劣があった。

古墳時代前期には、いくつかの単位のメンバーの中に、近畿を核とする墳墓築造のシステム（「前方後円墳体制」）に参加する者が現れ、その中での地位を表示するべく自らの墳丘を前方後方形に造る場合が散見されるようになった（先述のパターンi）。また、複数の単位を代表してそのような活動に参加し、その表示として、他のメンバーが葬られる小墳群から少し際立った場所に前方後

円墳を造る者も少しいた（先述のパターン ii）。ただ、これらのような前方後円墳が継続的に築かれるような状況はみられず、そうした立場や地位はその者限りの臨機的なものであったと推測するほかない。また、個々の単位を代表して小墳群中に造られる前方後方墳（パターン i）もまた、同じ小墳群中で継続することは稀で、これも臨機的な立場や地位の表示であったとみる以外にない。このように、小墳群を基盤として営まれた前方後方墳や前方後円墳の間に、一系の「首長位」のような連続性や構造的性を認めるのは困難である。それらの分布は、各造墓単位集団やその複数のまとまりのいくつか、時宜に応じて臨機的に「前方後円墳体制」に一時的に加わっては去るという行為が、古墳時代前期の間に繰り返されたことの痕跡にみえる。加えて、北地区に近い北側丘陵上では、以上と同じような状況に加えて、複数の小墳群を代表する位置にやや大型の方墳が造られる事例が認められる。これは、前方後円（方）墳とは関係の薄い、伝統的な既存の方墳による地位表示 [松木 2017] と考えられることから、この地域に住む造墓単位集団の間においてさえ、「前方後円墳体制」との距離感はさまざまであったと推測されるのである。

ただ、ここで注意しなければならないのが、先述のパターン iii の古墳、すなわち足守川流域の集落やそれを囲む小墳群からは遠く離れた地域縁辺部の山上に独立して築かれた、出現期の前方後円墳である矢藤治山、および前期前半の大型前方後円墳である中山茶臼山である。この両墳は、地域の基盤となる生産活動の場としての平野や、その暮らしに根ざしつつ近在に小墳群を営んだ各造墓単位集団からは遊離した位置づけを、規模や墳形の卓越性だけでなく、その立地にも反映させているのである。このような立地は、かつて近藤義郎が奇しくも同じ岡山の牛窓湾沿岸の古墳について指摘し [近藤 1956]、昨今議論が再燃している臨海性ないし海浜型の古墳 [公益財団法人かながわ考古学財団編 2015] の範疇に入れてもよい特性を備えている。そうした議論の中でも考察されているように、これら臨海性の古墳の築造やその主人公とされた人物の経済力や権威の基盤が、交易などの海上活動、あるいはそれを媒介とした遠隔地との交渉や関係形成等々、もっと大きな地理空間の中の、いわばそういう意味でさらに「政治的」な活動にあったことが窺えよう。言い換えれば、これらパターン iii の古墳は、平野で暮らしつつ小墳群を営む在地の各造墓単位集団から空間的に独立していたのみならず、経済的にも遊離したところに立脚するという、在地社会にとってはやや外的な存在であったと考えられる。すなわち、平野での農業生産からは遊離した広域の政治経済 (political economy) に立脚する形での代表者であったと推測されるか、もしくはそのような広域政治経済の主権元でもあった「前方後円墳体制」の中核に近い人物であった可能性もあろう。

矢藤治山・中山茶臼山、および前期後半に同じ吉備中山南東端に築かれた尾上車山古墳は、以上のように、在地社会にとってはやや外的な、言い換えれば近畿を核とする「前方後円墳体制」の中核に近い代表者という同様の位置づけをもって3代続いた前方後円墳という点で、従来の「首長系譜」の概念に近い意味づけが与えられるかもしれない。ただし、これまでに縷々述べてきたように、この「首長系譜」は、一つの平野の特定の「拠点集落」とのつながりはほとんど窺えない。また、3基のうち矢藤治山・中山茶臼山が地理的に辛うじてF地域に収まるにしても、尾上車山はE地域に近いなど、水利面を基盤とした小地域と必ずしも対応しない。これらのことは、パターン iii の古墳にみられる系列性もまた、「拠点集落」の姿をとる農業共同体やその空間的連続性と不可分であった従来の「首長系譜」とは同一視できないことを示唆している。

6 断絶の前期と中期

造墓活動の衰退と人口の低落 以上に述べてきたような構造，すなわち集落と小墳群およびパターン i・ii の前方後円（方）墳の間の密接なつながり，およびそれらとパターン iii の前方後円墳との間の距離，ならびにパターン i・ii・iii の前方後円（方）墳の間に認められる規模や内容の卓越性の格差に表れたような関係性の総体－それは在地社会と「前方後円墳体制」との複雑かつ双方向的な関係の反映であろうが－は，古墳時代前期後半に至るまで認められる。この間，先述の通りパターン i・ii の前方後円（方）墳の出現は気まぐれのものであって，それは在地社会の構成主体たる各造墓単位集団が「前方後円墳体制」に参加する仕方が，多分に臨機的・個人的・非組織的で，世代を超えて踏襲される地位システムのようなものではなかったことを窺わせるが，そのような状況自体が前期後半まで保たれるのである（図3）。

ところが，続く中期前半になると，パターン i・ii，すなわち小墳群の中やいくつかの小墳群を代表するような位置に築かれる前方後円（方）墳は，A～G の多くの地域でほぼ姿を消す。重要なのは，この事象の詳細を確認するために周囲の小墳群の動きをあとづけてみると，F の足守川流域の北地区北側の丘陵のように，小墳群自体は継続するけれども前方後円（方）墳はほとんどなくなり，やや大きな方墳や円墳がその位置づけを踏襲するところもある。しかし，それよりもしばしば，A～G の各地域にまたがって認められるのは，小墳群そのものが前期後半をもっていったん断絶し，造墓単位集団の営みそのものがたどられなくなるという一般的傾向である（図3）。前項でみた F の足守川流域では，南地区西側において前期後半まで営みが盛んであった黒住・矢部などの小墳群は，いずれも中期以降に続いた形跡が乏しい。

このような造墓活動そのものの衰退と関連して注目されるのは，各造墓単位集団が生活を営んだ平野部の集落そのものが，直前の前期後半から著しく縮小することである（図2）。足守川流域の南地区ではこの現象はとくに顕著かつ劇的で，前期後半のものとして確認された住居はわずかに1棟に過ぎない。かたや北地区は4棟が確認され，この前期後半に至って南地区と逆転し，一定程度の居住地の移動があったことを窺わせる。しかし，足守川流域全体の住居数がピークであった弥生時代末～古墳時代初頭の40分の1にまで落ち込んでいる背景には，人口そのものが大きく低落した可能性を想定しなければなるまい。住居数が低落する前期後半および中期前葉～中葉の合計年数は，前期前半よりも長い約150年間と推算できるので，住居数の減少が，設定した時期の実際の時間幅が狭いことに起因しているとは考えにくいからである。この人口低落はすでに前期前半から始まっているが，足守川流域で底を打つのが前期後半である。このことが，中期前葉～中葉に小墳群が減った根本的な要因であろう。ただし足守川流域では，住居数から推定される人口の回復が，他の諸地域に先駆けて中期前葉～中葉には始まっており，この段階の岡山平野では最大の人口集中地域としての位置づけを取り戻している。岡山平野全体で小墳群が断絶・減少するなか，足守川流域には中期前葉に始まる法蓮・雲上山および南坂といった小墳群が一定数認められる背景には，そうした状況があったと考えられる。

C の旭川下流域東側，D の同西側，G の高梁川下流域でも住居数の減少が指摘でき，前期後半から中期前葉～中葉にかけて人口の低落が起こったことがうかがえる。ただし，C・D の旭川下流域

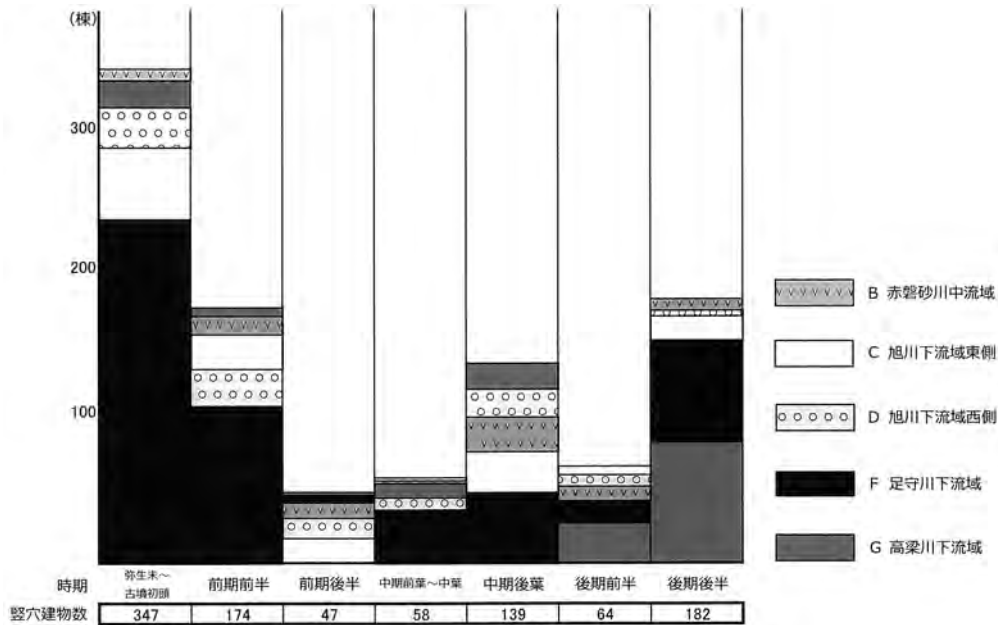


図2 岡山平野各地域の住居数の変遷

では低落傾向がやや緩く、底を打つのは足守川流域よりも遅い中期前葉～中葉である。そういう時間差はあるが、これらの地域では何処においても前期から中期前葉～中葉にそのまま継続する小墳群は確認されず、中期前葉～中葉に営みの中心がある小墳群も少ない。当然、それら小墳群の内部や近傍に営まれるパターン i・ii の前方後円(方)墳もほぼない。

巨大前方後円墳の出現背景 岡山平野の各地域で前方後円(方)墳の営みが絶え、それと軌を一にするかのごとく、飛躍的に巨大化した前方後円墳がごく少数、特定の地域にのみ現れるという事象が中期前葉～中葉に認められること(図3)は、従来から再三指摘がある。今述べたように、この事象のうち前方後円(方)墳の激減という動きは、それが根ざす小墳群そのものが衰滅するという「地盤沈下」によるものであり、それは地域人口の低落に起因があると結論された。では、前方後円墳の偏在と巨大化については如何であろうか。

中期前葉～中葉における前方後円墳の偏在化と巨大化は、二つの段階で進んだ。まず中期前葉の古い段階に、Cの旭川下流域東側の南を画する丘陵上に金蔵山(165m)、湊茶臼山(120m)が相次いで営まれ、Dの旭川下流域西側の平野部中央には神宮寺山(150m)が現れる。Fの足守川下流域では、北部の丘陵端に佐古田堂山古墳(150m)が築かれる。いずれも、小墳群とは、規模のみならず立地においても隔たりを保つ点で、前期における先述のパターンiiiに当てはめることができよう。金蔵山には方墳2基、佐古田堂山には円墳1基が伴うが、それらは両前方後円墳の出現の母胎や基盤となるようなものではなく、その規模や一部に知られた副葬内容から、両者の存在を前提として築かれた陪塚的な性格が想定される。なお、A・B・E・Gの各地域には、これらに相当するような規模や位置づけをもつ前方後円墳は見当たらず、岡山平野全体において前方後円墳の偏

在化が進み始めたことが窺える。

中期の前葉から中葉にさしかかる段階には、前方後円墳の規模の拡大と偏在化は、さらに顕著となる。Fの足守川下流域に造山古墳(350m)が、続いて中期中葉にGの高梁川下流域に作山古墳(270m)が築かれた。墳丘長で前者は全国4位、後者は10位前後に置かれ、その規模は列島レベルでも傑出している。造山は、丘陵の中に入江のように湾入した湿地の中に伸びた半島状の小尾根を加工して築造されており、周囲には同時期の小墳群はなく、もっとも近い集落からも人跡のない湿地を挟んで1kmばかりも隔たっている。山上ではなく平地ではあるが、前期以来のパターンiiiに特有の独立的な立地を受け継いでいる。作山もまた、周囲に同時期の小墳群はなく、同時期の主要な集落域からはやや離れている。造山には、帆立貝形前方後円墳や方墳を主とする6基の陪塚があり、近隣には同時期の大型前方後円墳である小造山古墳(146m)が築かれている。作山には陪塚はないが、直後の築造とみられる宿寺山古墳(118m)が近くにある。

中期前葉～中葉の社会変動 造山・作山は、その規模にみられる顕著な卓越度も勘案すると、近侍する小造山・宿寺山も含めてパターンiiiの特性を極端なまでに際立たせた存在といえよう。先に述べたように、この時期には前期よりも人口が低落して集落も縮小し、そこに根ざした小墳群も衰退していることを考え合わせると、在地社会に対しては外的という、パターンiiiの古墳について先に前期のところで指摘した歴史的な性格を、さらに貫徹させたのが中期前葉～中葉の巨大な前方後円墳であったと評価できる。

岡山平野の在地社会は、人口の減少を原因として前期後半から中期前葉～中葉にかけて衰微した結果、「前方後円墳体制」への関わり方も変化したと考えられる。あるいはまた、「前方後円墳体制」を主宰する近畿の中央勢力の側が、人口が減少して空洞化が進んだ岡山平野の諸集団との関わり方を変えなければならなかったという双方向的な関係も窺えよう⁽⁵⁾。具体的に述べると、人口の減少によって岡山平野の各造墓単位集団が縮小・廃絶・分散し、「前方後円墳体制」に参与する余地もなくなった。こうして「前方後円墳体制」と在地社会とのつながりが空疎化したのを機に、もとより在地社会からは遊離していたパターンiiiの古墳に葬られるような人物、すなわち近畿の中央勢力が主催する「前方後円墳体制」の上位に位置づけられ、在地の農業生産よりも広域の政治経済に連なることで力を発揮してきた人々が台頭し、岡山平野のいくつかの場所に並立した。中期前葉でも新しい段階になるとこのような古墳はさらに絞られ、まずF地域の造山古墳・小造山古墳が、続いてG地域の作山古墳・宿寺山古墳が、そうした位置づけを寡占するようになった。

その権化ともいべき造山古墳は、従来のiiiパターンの古墳以上に、諸要素において在地の小墳群から著しく乖離し、「前方後円墳体制」の頂点に位置づけられる近畿中央部の巨大前方後円墳との距離を縮めている。すなわち、墳丘長350mという規模が同時代の最大の前方後円墳である石津丘(百舌鳥陵山・伝履中天皇陵)古墳と同等であるのみならず、その墳形の企画や設計の原理・技術にも高度な共通性が指摘される[西川1975, 新納1992]。加えて、樹立された円筒埴輪や器財埴輪の形態や技法にも、近畿中央部の巨大前方後円墳のそれらと同じ要素が認められ[野崎1999, 松木1994]、「前方後円墳体制」の中核部でそれらの製作を担った工人が、そこから派遣されるか何かの形で造山古墳の埴輪製作にも関与した可能性が高い。このような点からみても、造山古墳の造営には、在地社会よりもむしろ「前方後円墳体制」を主宰する近畿中央勢力側のイニシアティブが強

く働いていたと考えられる。言い換えれば、そこに葬られた人物は、近畿の中央勢力に寄り添いつつ、そこを核とする広域政治経済の主導者として岡山平野の在地社会の統制に乗り出した有力者であったと推測されるのである。

造山の被葬者に関わるそのような推定と関連して注意されるのは、距離的にもっとも近い集落である高塚遺跡では、岡山平野全体にわたる人口の低落傾向とは裏腹に、造山が営まれた中期前半には住居数が増加し、人口の集中域を形成していたとみられる点である。さらに重要なことに、高塚遺跡では、住居への竈の採用、韓式系土器や鉄滓の出土など、それまでの岡山平野にはあまりみられなかった外来の要素が顕著である。また、作山古墳に近い窪木薬師遺跡では、中期前半の住居址から鉄鋌や朝鮮半島系の最新式鉄鋌など、外部からの新技術による生産活動の痕跡がいっそう明らかである。加えて同じ頃、近隣の丘陵端で、岡山平野最古、列島でも古い部類に属する初期の須恵器窯である奥ヶ谷窯が操業された。

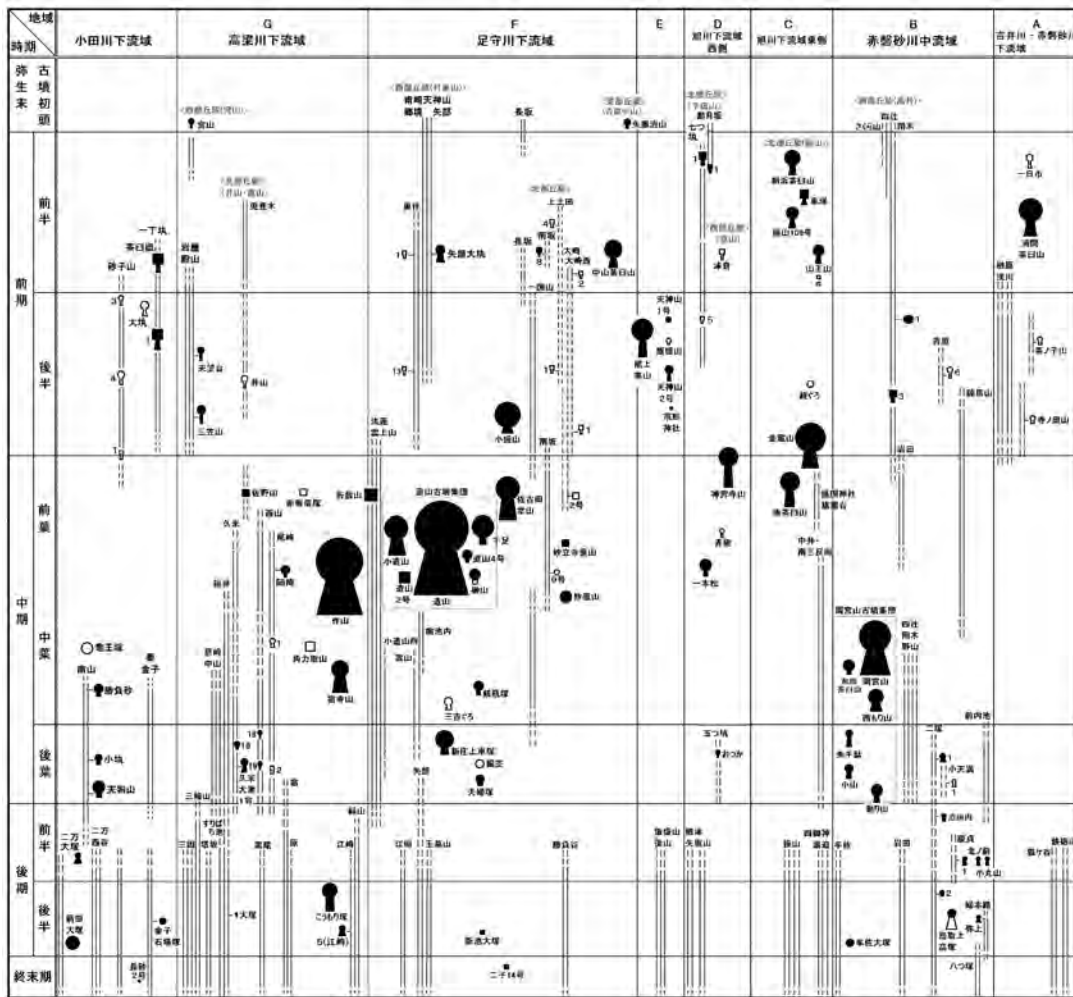


図3 岡山平野における古墳の展開

古墳マークの形と寸法は、それぞれ墳形と規模を表す。白抜きは時期が不明確なものを示す。二重線は小墳群を示し、その中に配置された前方後円(方)墳は小墳群中に築かれたもの(パターンi)を、そこから短線を出して配置された前方後円(方)墳は小墳群から望まれる場所に築かれたもの(パターンii)を、小墳群から離れて配置された前方後円(方)墳等は独立して築かれたもの(パターンiii)を、それぞれ示す。

このように、集落が衰退した直後のこの時期に、生活や生産に新たな技術をもった居住地や製作拠点が現れ、しかもそれが、巨大前方後円墳の築造と時間的にも空間的にも連動するようにみえる点には留意すべきであろう。すなわち、これらの新しい生活や生産は、巨大前方後円墳の被葬者によって領導された人々が定着し、活動を開始した痕跡とみなしうるのである。そこに、古墳に色濃く窺えた近畿中央部の情報や技術や人材に加え、外来の文化・技術・物資（竈・韓式系土器・鉄鋌・鉄器製作・陶器生産）が密度高く認められるなど、在地社会を越えた広域性を帯びていることは、それを領導した巨大前方後円墳の被葬者が、広域の政治経済に立脚した活動によって権威を得ていたという先の推定を裏付けよう。中期前葉～中葉は、「前方後円墳体制」の主体そのものが、そこに連なる巨大前方後円墳の被葬者の活動を媒介として、在地の社会と経済に介入・再編した時期と考えられるのである。

7 中期後葉の人口回復と造墓単位集団の再編成

中期後葉における住居と小墳群の増加 中期後葉に入ると、岡山平野の各地域に人口の回復が認められる。すなわち、集落の発掘調査例が一定の蓄積をみせるB・C・D・F・Gでは、いずれの地域においても、住居数は中期前葉～中葉の2倍から10倍以上も増加しており、すでに造山古墳の築造とともに中期前葉にいち早く回復していたFの足守川下流域でもなお微増している（図2）。なお、中期後葉の想定時間幅は約25年と短いので、これは見かけの上の増加ないことは確実であるばかりか、むしろ実際には見かけ以上に増加していた可能性もある。

同時に、中期前葉には多くが廃絶し、衰退が著しかった小墳群が、中期中葉の新しい段階から中期後葉にかけて再び増加してくる。Bの砂川中流域では、前期後半をもってひとたび下火となっていた高月丘陵上の小墳群に回復の動きがみられ、四辻・用木・野山などでこの段階の小墳が数基ずつ確認されている。これらのうち5基に、川西宏幸氏の編年によるⅣ期の円筒埴輪の樹立がみられる。Cの旭川下流域東側は、前期の小墳群の実態がよくわからない地域であったが、中期には平野部の中井・南三反田において方墳・円墳からなる小墳群が発見され、中心時期は中期中葉の新しい段階から中期後葉にある。Dの旭川下流域西側では、北辺をなす半田山山塊の山裾に中期後葉とみられる小墳群がかつて存在し（五つ坩古墳群など）、近隣の岡山大学構内遺跡からⅣ期の円筒埴輪片などが発見されている。Fの足守川下流域をみると、まず南地区では、前期の小墳群であった黒住・矢部などと同じ西側の日差山山塊上に、雲山・前池内など、中期中葉の新しい段階から中期後葉を中心とする小墳群が展開し、Ⅳ期の円筒埴輪やU字形鋤先等の鉄器の副葬がみられる。北地区では、北側の丘陵上にある前期以来の南坂・一国山などの小墳群の中に、曲刃鎌や胡籙などを副葬したこの時期のものが確認できる。注目できるのは、北地区の中心集落といえる高塚遺跡の南西側で南地区にも近く、また造山古墳を望む位置にある丘陵上で、新たな小墳群の展開が始まることである。一部は造山古墳の造営時から形成が始まる法蓮・雲上山のほか、小造山古墳に接して中期中葉の新しい段階から中期後葉に営まれる小造山西などで、このうちの法蓮40号には横刃板鋌留短甲が副葬されていた。一部にはⅣ期を中心とする円筒埴輪や家形埴輪の樹立がみられる。もっとも顕著なのはGの高梁川下流域で、北辺をなす山塊の南斜面に久米・福井・恩崎・高池・小寺・西山・中山が、南辺をなす山塊北斜面に前山・前山北・龍王山など、数多くの小墳群がある。これらの小

墳群のうち内容が判明しているものは約30基あるが、確実に前期に属するとみられるものはなく、ほぼすべてが中期であり、埴輪や須恵器、および龍王山で知られる横矧板鉞留短甲などの副葬品の内容からみて、その大半は中期中葉の新しい段階から中期後葉の所産である可能性が高い。

小墳群と前方後円墳 以上のように、中期中葉の新しい段階から中期後葉にかけて、岡山平野の各地域で小墳群が再び盛んに築かれるようになる。このことが、中期後葉にははっきりと窺えるようになる人口の回復と密接に関連している可能性はきわめて高い。その一方で、中期前葉～中葉に一部の地域で巨大化した前方後円墳は、中期中葉の新しい段階にBの砂川中流域に現れた両宮山古墳(206m)を最後として跡を絶つ。これ以降、パターンiiiの大型前方後円墳自体、後の6世紀後半にGの高梁川下流域に築かれるこうもり塚を唯一の例外として、岡山平野から姿を消すのである。

このような状況のかたわら、パターンi・iiの中小前方後円墳が、中期中葉の新しい段階から中期後葉には再び各地域に出現する。この事象がとくに明確なのは、小墳群の勃興が顕著なGの高梁川下流域の中期後葉の状況で、久米大池1号(54m)・久米18号(26m)・西山18号(20m)・西山19号(20m)などが知られており、立地は、もっとも大きな久米大池1号がiiのパターン、残りは小墳群中に交じるiのパターンである。なお、そのうち久米18号は、前方部が短い帆立貝形である。他の地域をみると、Bの砂川中流域ではいくつかの小墳群に囲まれた前方後円墳の二塚1号(37m)、Dの旭川下流域西岸では五つ塚の小墳群中にあるおつかなど、パターンi・iiの中小前方後円墳が知られる。これら各地域のパターンi・iiの中小前方後円墳の勃興により、中期後葉は、古墳時代全体を通じた中で、帆立貝形を含む前方後円墳がもっとも高密度で築かれた時期となっている〔宇垣2004〕。

中期後葉の社会再編成 中期後葉におけるこうした前方後円墳の簇生が、先に述べたこの時期の集落の再生と人口の回復に根ざしていることは疑いない。その点では前期にみられたような状況が、中期前葉～中葉の断絶を挟んで再現したように見え、さらに、前方後円墳を交える小墳群と平野部の集落との間に、1対1の明確な空間的対応関係を見出すのが困難なものも前期と同様である。したがって、一つの集落やそれを中心とした一水利面上の集落群を構成する何らかのグループないしはソダリティがそれら小墳群の造墓単位集団となるという在地社会の構造そのものが、中期前葉～中葉の断絶のあと、質的に変化したとは考えがたい。

しかし、それぞれの集落の生活や生業、およびそれが営む小墳群、ならびにそこに根ざしたパターンi・iiの前方後円墳の内容には、中期前葉～中葉の断絶を挟んで大きな変化がある。まず集落は、ほとんどが竈付きの住居から構成され、須恵器の使用が一般化している。小墳群には、そこに混じる前方後円墳も含めてしばしば埴輪が樹立され、短甲など、近畿を中心に流通する政治的な器物を副葬するものも散見される。

このように、中期後葉に勃興・再興する集落の活動には新しい外来の要素が色濃く見え、それが営む前方後円墳の内容にもその一端が反映されている。また、こうした前方後円墳やそれが根ざす小墳群には、短甲副葬や埴輪樹立など、近畿を核として共有される要素の浸透がこれまでよりもはるかに深い。さらに、すでに繰り返し指摘されているように、先立つ中期前葉～中葉に隆盛したパターンiiiの大型前方後円墳がこの時期には消滅する。以上のことから、中期中葉の新しい段階から

中期後葉にかけては、岡山平野の各地域の集落に居住する造墓単位集団が、それを代表して「前方後円墳体制」に参加する有力者を再び出し、そこに参加したことによって広域の政治経済にじかにつながりえた彼らを通じて、新たな産物や技術や情報、あるいは外部からの移住者・移動者を在地社会に導入して、生活や生産を活性化したと考えられる。

中期前葉からの歴史的展開の中に以上のような状況を位置づけると、中期前葉～中葉には、「前方後円墳体制」を主宰する近畿中央部の中央勢力に近い立場で岡山平野の在地社会に臨んだごく少数の有力者が、人口の減った岡山平野の中でも一部の特定地域（Fの足守川下流域：造山古墳、Gの高梁川下流域：作山古墳、少し遅れてBの赤磐砂川中流域：両宮山古墳）で上記のような活動を主導していたのが、中期後葉になるとこうした活動が岡山平野の他の各地域にも広まって定着した。それによって地域の人口も回復し（あるいは回復した人口によってこうした活動が受け入れられ）、活動も在地社会により直接的に根ざした、中小前方後円墳に葬られる程度の有力者たちによって取り仕切られるようになった。すなわち、中期後葉には、新来の技術や情報に基づいた生活や生産が岡山平野各地域に扶植され、各地域の在地の有力者が「前方後円墳体制」の中核とより直接的に結びついた形でそれを主導するような社会の再編成があったと推測される。そのことと、集落や小古墳群の再興にうかがえる人口の回復との間に、密接な有機的関連があった可能性が高い。

8 律令社会に向けて

人口の再増加と小墳群の展開 続く後期前半には、岡山平野各地域の集落において住居数が減少し、再び人口の落ち込みがあったと考えられる。土器編年とその継続期間の設定によるバイアスの可能性も否定しきれないが、小墳群の動向を合わせてみると、後期前半前後に、律令社会に向けて人口と社会の最後の画期的な展開があったことはほぼ確実である。具体的にいうと、中期後葉に勃興した多くの小墳群は、少数例を除いてそのまま後期後半のいわゆる後期群集墳とよばれる小墳群にはつながらず、これら後期後半の小墳群は、中期後葉の小墳群とは近隣の別の場所で形成を開始している。すなわち後期前半に、小墳群の展開に一時の断絶と再開の動きがあったと考えられ、それが住居数の減少に背後にうかがえる人口の一時的な低落と関連するとみられるのである。

後期後半の小墳は、ほとんどが横穴式石室を内蔵していて表面からの判別が容易なので、分布や基数を含めた動向をつかみやすい。Aの吉井川下流域で約50基、Bの砂川中流域では前期以来の小墳群造営地である高月丘陵および北西部・東部の丘陵地帯に約50基が散在する。Cの旭川下流域東側では平野の南北を画する龍ノ口山山塊と操山山塊に合わせて約200基あり、とくに操山の小墳群は総計110基からなる大規模な「群集墳」をなす。Dの旭川下流域西側は、市街地に近いために開発や採土で失われたものも多いが、南西部の矢坂山山塊などを中心に約50基が現存し、北部の半田山山塊を越えた津高の小盆地を含めると、地域全体で約150基を数える。Eの足守川下流域では、周辺の丘陵部のいくつかの場所に多くの小墳群が散在し、基数は合計すると約450基ある。さらに、Gの高梁川下流域でも、南北を画する丘陵上に総計約360基からなる小墳群が散在し、そのうち南西部の三因古墳群は200基以上が集中する顕著な「群集墳」をなす。

これら小墳群には、Bの斎富やFのすりばち池のように、後期前半以前の小墳群からそのまま継続するものも少しあるが、後期後半に新たに出現するものが大多数を占める。しかもその立地は、

Fの北部やEの北西部・南西部で典型的に認められるように、平野から見て後期前半以前の小墳群の奥側に移る傾向が明らかである。加えて、後期前半以前、とくに中期後葉の古墳群は平野周辺の丘陵上にほぼまんべんなく分布するのに対して、後期後半に始まる小墳群は特定の場所に偏在する様子を見せる。その最たるものが、Cの操山、Gの三因といった大「群集墳」であり、特定の丘陵や山腹の、そのまた限られた区域に集められたかのような感が強い。これまでも再三論じられてきたように、後期後半の墓域は、各造墓単位集団が近隣の丘陵や山腹に半ば自在に設定したような「自然」な分布ではなく、一定の規範に従って人為的に、ないしは政治的に再設定された可能性を想定せざるをえないであろう。

「前方後円墳体制」の終焉 前方後円墳は、Bの砂川中流域に二塚2号(23m)と弥上(30m)が、Gの高梁川下流域にこうもり塚(100m)、江崎5号(45m)、福井12号(帆立貝形,13m)が現れる。しかし、確実に後期後半に属する前方後円墳は岡山平野ではこの5基のみで、中期後葉に比べると半数以下に減少している。また、A・C・D・E・Fの各地域にはこの時期の前方後円墳は確認されていない。5基のうち、こうもり塚は小墳群から独立したパターンiiiに、残余の4基は小墳群中に交じるパターンiに属し、造墓単位集団中からそれを代表して「前方後円墳体制」に参加する在地の有力者と、在地社会から距離を置いて「前方後円墳体制」を主宰する中央勢力に寄り添って地域に臨む権威者との二重性がうかがえる点は、前期以来の構造を残しているといえる。しかし、前方後円墳の数自体が大きく減少して分布の密度を薄め、パターンiiiのこうもり塚も含めて墳丘の規模も中期のそれに比べるべくもなく縮小していることは、「前方後円墳体制」そのものが、在地社会と列島社会中枢の関係を代弁・演出しうるしくみとはなりえなくなりつつあった状況を示すものとみなせよう。それよりも、小墳群が展開する墓域そのものを人為的に再設定するような別の規範が、墳墓の築造という営みそのものにも影響する新しい社会の枠組みが現れつつあったと推測できる。

この新しい枠組みの延長に、律令社会とそれを軸とした国家の完成期が訪れることは疑いあるまい。古墳時代も終わりに近いこの時期となると、もはや考古資料のみからそれに向けての社会変化の過程を具体的にあとづけることは難しいが、その過程の出発点に、古墳時代後期後半の集落に見て取れたような人口の増加があった事実は重要であろう。大陸からの新しい文化の流入などもあいまって、古墳という表徴自体が価値を失いつつあったこの時期においては、人口の増加が不可避的にもたらす社会の複雑化に対応するための新たな規範システムが必要であり、その結実が、ポスト「前方後円墳体制」として奈良時代に完成をみる国家であったと理解しておきたい。

③……………古墳時代における列島諸地域の社会構造と倭王権

1 地域の基礎構造

「首長系譜」変動の意味 以上では、「首長系譜」論・「前方後円墳体制」論および「拠点集落」論の問題意識を継承しつつ、その方法の見直しと実践を通じて、岡山平野の古墳時代の社会構造とその変化を描写しようとした。まとめると、まず首長系譜論については、①古墳造営の基礎単位である小墳群の営みと、「首長系譜」という名で研究者が抽出して並べた前方後円(方)墳等の系列

とは、次元や実体性を異にする別個の概念である。②「首長系譜」に並べられた前方後円（方）墳のうち、中小規模のものは小墳の造営主体－造墓単位集団－の一つないし2～3を代表する在地社会の小有力者によるものとみられるのに対し、大規模なものはそうした在地社会から遊離または独立してもっと大きな地域を代表する人物か、「前方後円墳体制」を主宰する中央勢力の側から在地社会に臨むような、さらに広域の利害を体現する人物によるものとみなされる。すなわち、前方後円（方）墳の規模の大小は、造営基盤の広狭ないしは造営集団のレベル（在地的－地域的－広域的）の差異を直接的には反映している。③したがって、前方後円墳の規模の変異や変動は、固定的な1集団やその代表者の政治的地位や経済的実力の多寡や盛衰ではなく、それを築いた者が存立する基盤の広狭ないしは集団数、換言すれば代表する集団レベルの高低と、より直接的に関係する。④これを噛みくだいてやや具象的に言い換えると、たとえばある地域にたくさんの中小規模の前方後円（方）墳が築かれる状況と、一つないしごく少数の大規模な前方後円（方）墳が一つ築かれる状況とが継起するプロセスは、地域やその集団の政治的地位の盛衰ではなく、在地社会が小有力者を通じて「前方後円墳体制」の末端に参与する時期と、「前方後円墳体制」の中核側や地域を越えた広域の利害を体現する大人物が在地社会に直接望む時期とが交替するプロセスを反映している。つまり、「首長系譜」の変動といわれるものが反映するのは、政治的な変動というよりもむしろ、「前方後円墳体制」の中核－すなわち倭王権－との関係に表われた在地社会の構造変化である。そしてこの構造変化は、前章で詳しく分析し、また後にもまとめるように、地域の人口とその分布様態の変化に、直接的に起因する可能性が高い。

「前方後円墳体制」の可塑性と多様性 次に「前方後円墳体制」については、これまでの諸説が、大規模な前方後円墳から群小の方・円墳までを一連の秩序表示体系とみて、倭王権の中核から諸地域に付与されたシステムと理解してきたのに対し、①群小の方・円墳（小墳群）は、「前方後円墳体制」の成立に先立ち、列島の広範囲において共同墓地の分節化という造墓原理の転換の結果として生み出された社会の基礎構造の体現であり、「前方後円墳体制」は、それを利用しつつ、そこへ後発的・二次的に外挿された政治システムの表示である。②その外挿のされ方、言い換えれば在地の社会がそれに参与する意思の強弱やその形は、地域によりさまざまである。具体的には、i) 「前方後円墳体制」の中核的表象としての前方後円（方）墳がほとんど受容されない出雲東部、ii) 前方後円（方）墳が在地社会の地位表象としても珍重され、積極的にアレンジされて盛行する四国北東部〔北條1999〕などに対し、岡山平野は、iii) 近畿中央部の様式を踏襲した前方後円（方）墳の秩序が、在地社会の地位の秩序と合致する形で導入されており、「前方後円墳体制」にきわめて親密に参与した地域の一つであったと考えられる。

同時に、③「前方後円墳体制」への参与のしかたは、同じ地域でも時期によって変動している。岡山平野では、先述のように、前期および中期後葉には在地の有力者たちがかなりきめ細かく「前方後円墳体制」の末端に参与し、自らの集団の小墳群に寄せて中小の前方後円（方）墳を築いているのに対して、中期前葉～中葉においてはそれら末端部分が空白化するかたわら、在地からは距離を置いて大規模な前方後円墳を営み「前方後円墳体制」の上位からじかに在地社会に臨む少数の大有力者の地位が顕在化した。このことは、「前方後円墳体制」はその初期から終わりまで、またそれが多少なりとも及んだ地域全体の隅々にわたるまで一貫して変わらぬ安定性をもった強固な機構

ではなく、時と場所に応じて統制や影響の範囲や程度を異にし、内容も組み替えられるフレキシブルな表象体系であったと考えられる。このことは、「前方後円墳体制」の主宰者たる古墳時代倭王権の本質を表しているといえよう。

古墳時代に「拠点集落」はあったか？ 最後に「拠点集落」については、①血縁を軸とする各造墓単位集団が、その営んだ小墳群から見下ろせる平野部の集落に集住していたであろうことはほぼ明らかであるが、集落中に認められる居住域の空間的分節と造墓単位（小墳群）との対応関係は実証しがたい。②「前方後円墳体制」の末端に参与して自らが属する小墳群中に中小の前方後円（方）墳を築いた在地の代表者は、麓の平野部の集落内に居住していた公算が強いが、その住居と特定できるような遺構はない。また、「前方後円墳体制」の上位に地位を占め、集落や小墳群から遊離・独立して大型の前方後円墳を築いた有力者は、その居住地も集落から分離していた可能性があるが、岡山平野においてはその遺構は未発見である（すなわち、いわゆる「首長居館」に当たるような遺構の検討から、古墳を造営した集団の居所に迫ることは、現状では難しい）。③小墳群を営んだ各造墓単位集団の居住地としての集落は、住居数の推移をみるかぎり安定度は低く、人口の大きな増減による明滅を繰り返しており、一つの「首長系譜」を歴史的に支え続ける「拠点集落」としての実態は復元しがたい。

古墳時代社会のイメージ 以上、「首長系譜」「前方後円墳体制」「拠点集落」という、現在までの古墳時代研究の軸となっている3つの概念について、その実体性を点検してみた。総じて言えるのは、この3概念を軸とした古墳時代社会の復元は、「拠点集落」に支えられた「首長系譜」群が「前方後円墳体制」という地位表示システム上で盛衰するという、いわば太さの増減を繰り返す幾筋ものタテ糸の並びのようなイメージでなされてきた。これに対して本論では、タテ糸の連続性をほぼ否定し、「前方後円墳体制」についても、その中央から地方へと一方向的に付与されたものではなく、地方ごとに多様な主体性や程度で受容され、また同じ地域でも時期ごとにさまざまな状況の展開があったと考えた。

このようなイメージをもとに、前章において岡山平野を対象にみてきたようなことが、列島のさらに広い範囲にどこまで敷衍できるかという問題にも留意しつつ、古墳時代の地域と倭王権との相互関係を軸とした歴史の展開を以下で展望して結びとしたい。

2 地域と倭王権の歴史的展開

東日本から進む古墳の成立 まず、弥生時代から古墳時代への移行を告げる造墓単位の分節化、すなわち小墳群の成立は、西日本では先述のように弥生時代後半から古墳時代前期初頭までの間に認められるが、実は東日本ではそれよりも早く、弥生時代中期後葉・宮ノ台式期の東京湾沿岸等で顕在化する方形周溝墓は、すでに基本的に個別区画の小墳群であって、西日本に古くからあるような集塊状の共同墓地はみられない。仮にその墳丘の小ささや密集度を重視して、宮ノ台式期の方形周溝墓群を西日本の集塊状共同墓地と同じようなものとみなすとしても、次の後期後半には、もう少し数が絞られ、やや大きくなった方形周溝墓からなる小墳群が住居群と対応する形で台地上に分布するような状況が、東京湾東岸などで認められるようになる [大村 2015]。このような小墳群は、墳丘規模・内容・分布様態などのさまざまな点において、本論でみてきた岡山平野の小墳群と類似し

ており、それと同様、分節化した造墓単位と理解する。重要なのは、その出現が岡山平野よりも明らかに古いという点である。つまり、さきの第2章第3節で整理した古墳出現の二つのプロセス

① 個別区画墓群の成立、すなわち、社会の基底からの動きとして進んだ造墓の分節化

② 前方後円（方）墳の成立と普及、すなわち、政治的な動きとして進んだ墳墓の序列化

のうちの①は、少なくとも岡山平野より、東日本のほうが早く達成したということになる。造墓原理に表示された新しい社会、すなわち古墳の基礎原理は、東日本で先行して生み出されていた可能性が高いのである。

東日本においてこのような原理が早くに生まれた要因については今後の考究課題であるが、そこが弥生時代初頭から累世的に高密度で集落が営まれたのではなく、中期後半から後期後半にかけ、中部地方などを直接の原郷として流入した人々も一つの大きな人口源としつつ、急速ないしは促進的な社会形成がなされたことと関連すると予察している。大村直は、弥生後期の南関東では、血縁や出自ではなく個人の能力による有力個人のもとに人びとが集合や離散を繰り返す社会が形成され、またこのような社会の基層が多くの移入者の迎え入れや人口の流動を可能にしたと考える〔大村1995〕。筆者もまた、人口の流動化が古い社会を解体して新しい社会を作ったことが造墓の分節化、すなわち社会の基底の動きとして進んだ古墳出現の素因である点で大村と視座を共にするが〔松本2017b〕、この動きが関東を中心とする東日本において早く進んだことは明らかであり、それはこの地域が、中期後半の農耕確立の時点からすでに多くの移動人口で構成される流動的な社会であり、西日本のような弥生時代の初期段階から長く続く共同体の伝統あるいは桎梏をもっていなかったからであると予察している。

②の「政治的な動きとして進んだ墳墓の序列化」についても、東日本ではすでに中期後半には特定の方形周溝墓（小墳）が大型化して独立的に立地し〔安藤1991・1996〕、後期後半以降になると方形周溝墓群（小墳群）の中に「陸橋部」を備えるものが現れて後の前方後方墳につながる〔田中1986など〕。前方後円（方）墳のうちでもとくに前方後方墳を形成していくこの東日本固有のプロセスが、当初から「前方後円墳体制」に組み込まれてその下位に生じた動きとは、文脈的にも年代的にも考えがたい。この前方後方墳発生プロセスは、その淵源をいまだピンポイントでは明らかにしがたいけれども、実情としては当時の人口流動化を背景に、ほぼリアルタイムで情報を交換・共有しながら、西は近江付近までをも含む東日本のいくつかの地域で同時多発的に進行したと推測される。こうした動きが、直後の「前方後円墳体制」確立期において前方後方墳が卓越するという東日本の地域色につながった可能性が高い。すなわち、「前方後円墳体制」のうちでも前方後方墳を主体とする部分は、すでに赤塚次郎や宇野隆夫が考えたように東日本の諸地域で生み出された可能性が高く〔赤塚1992、宇野1995〕、さらにそれが、次に述べるように西日本で形成された前方後円墳を軸とする部分に、二次的に融合したものと理解される。

その、前方後円墳を軸とする墳墓の序列化にも、先述のように四国北東部〔菅原1983〕などでの動きが指摘されており、東日本と同様に、あるいは東日本の諸地域とも情報を交換・共有しながら、西日本においても同時多発的に進行した可能性がある。いわゆる纏向型前方後円墳の顕著な大型化と、それを前提とした地方拡散が奈良盆地東南部を核として進行したことは疑いないが〔寺澤1988・2016〕、今のところその進行は 確実には本論でいう弥生時代末～古墳時代前期初頭（庄内

式新段階～布留0式期)に下るので、「前方後円墳体制」に向かって進行する墳墓序列化のプロセスの中では後半の動きとして位置づけられよう。その直後、箸墓に代表される、いわゆる定型化しなおかつ巨大化した前方後円墳が、それまでに東西各地で生み出された墳墓の秩序群を統合してその頂点に置かれるべく創出され、「前方後円墳体制」は一応の完成をみたと理解されよう。

古墳時代前期の地域と倭王権 以上、集落と小古墳のあり方を軸に復元した古墳出現の過程を最終的にまとめると、

- 一、東日本諸地域から、続いて西日本諸地域を中心に造墓単位の分節化が進行し、個別区画の小墳群が成立していった。
- 二、それを前提として、弥生時代後期後半以降、東日本諸地域において方墳（方形周溝墓）を基調とする小墳群の中で墳墓序列化の動きが顕在化し、前方後方墳が発展した。同時に西日本でも、主として前方後円墳を軸とする墳墓序列化が進行した。
- 三、弥生時代末以降、奈良盆地東南部でいわゆる纏向型前方後円墳の大型化と、それによる序列の明示が発展し、東西各地ですでにそれぞれ進行していた墳墓序列化の動きを統合し始めた。
- 四、定型化・巨大化した前方後円墳の箸墓が築造され、このことによって各地の墳墓序列化の動きの統合過程は、近畿中央部を核に一応の帰結を迎えた。「前方後円墳体制」の完成、すなわち倭王権の確立を、ここに想定することができる。

以上のように叙述できる倭王権確立のプロセスは、造墓単位として独立した個人及びそのキョウダイトのつながりを軸とする集団が、農業のほか交易や交通などさまざまな営みに従事しながら共生しつつ競合し、そこで得た優位をその小墳群の立地や墳丘規模に演出しながら、それぞれの代表者が互いに連携してシステムを作り、自らの墳丘に前方部というしるしを付け合うことによってシステムへの参与とそこでの地位を表示するようになった動きを示すと考えられる。

このような地位表示の慣習は、土器の広域移動が証明する流通の活発化や人口の流動化を背景に、さらに広い範囲の多数の参加者間の関係を明示するべく、既存の序列表示の上へ上へと架構するように、より複雑で階層化した序列表示が被せられていった。この過程は、在地社会を代表して秩序に参加していた有力者たちの中に、より広域の利害調整役として在地社会に臨む上位の有力者を生み出し、さらにそれらを代表して外部社会との窓口やシステム全体のアイデンティティを体現する最高権威者－倭王－の地位を創出するというように、代表権の上積みという形で地域間の統合－倭王権の形成－がなされていったことを反映しよう。いわゆる纏向型前方後円墳の規模や集中度、ならびに定型化した前方後円墳の発生地からみて、このような上積み過程の最終的な中核となったのが奈良盆地東南部を中心とする近畿地方であったことは確かで、そのことは、纏向遺跡の規模や他地域産・他地域系土器の出土状況からも裏打ちされる。

このようにして、弥生時代末～古墳時代初頭に当たる3世紀を前後する時期には、分節化をなしたげた列島各地域の造墓単位集団が、できつつあった倭王権との距離感をさまざまに取りながら、時にそれを権威の背景として利用もしつつ、在地での経済活動を運営していた。逆にそうした活動の成果が、参与する代表者たちとそのネットワークを媒介として集約・吸収されることにより、倭王権の経済基盤は成り立っていたであろう。

人口増減と中期の社会変動 古墳時代前期社会のこのような経済・社会・政治の構造は、中期

に入る4世紀後半には急速に解体する。そのことは、岡山平野を対象に前章で詳述した中小前方後円(方)墳の消滅、より根本的にはそれらを輩出していた小墳群そのものの急速な衰退、さらに根本的にはそれを支えていた集落の縮小と著しい人口減少という一連の事象に明示されているが、他の地域においても同様の事象が広く認められる。人口減少、集落の縮小や解体、造墓活動の低落という大きな経済的・社会的変動が、列島の広い範囲でこの時期に生じた可能性は高い。すなわち、岡山平野以外でも、たとえば近隣では讃岐平野〔大久保2000〕、遠方では東北〔藤沢2004〕など、多くの地域で指摘されている前期「首長系譜」の軒並みの断絶は、人口減少を基因としたこの列島規模の社会変動に根ざしたものと考えられる。

この変動をはさんで前方後円(方)墳がほとんどなくなってしまう近畿北部(丹後)や東北南部のような地域がある一方で、岡山平野などいくつかの地域では、それまでの中小前方後円(方)墳の衣鉢をあたかも糾合するかのように、単一またはごく少数の、著しく大規模化した前方後円墳が造営されるという現象が認められる。岡山平野の造山のほか、九州南部では日向の女狭穂塚(180m)、関東北部では毛野の太田天神山(210m)などが代表例で、やや小規模なところでは四国・讃岐平野の富田茶臼山(139m)や徳島平野の洪野丸山(105m)等々を例示することができよう。

この現象は、先の岡山平野での分析からは、人口減少に伴う在地代表者層の空白化により、倭王権により近い上位の有力者が在地の経済活動に直接介入するようになり、大陸系の新しい技術や生活を導入して在地社会の生活と生産の再編を促した結果と考えられる。他の地域でも同様の分析を深化させる必要はあるが、初期の竈、馬の使用、陶器(陶質土器=「須恵器」)生産などの新しい要素の受容は、各地においてこの時期からかなり一般的に指摘されており、こうした在地経済の再編成が、岡山平野以外の諸地域でも、先に例示した単独・少数の大型前方後円墳の被葬者を軸に進められた可能性が高い。

こののち中期中葉の新しい段階から中期後葉における在地代表者層の中小前方後円墳(帆立貝形を含む、なおこの段階には出雲や下総などのごく一部地域を除いて前方後方墳はない)の再びの増加は、「首長系譜」の再現ないしは復活などと形容されて多くの地域で指摘されているが、この動きが、基盤をなす小墳群の再増加を前提として生じていることを見逃してはならない。岡山平野での分析でみたように、この動きとともに集落数や住居数も再増加し、窯業生産や馬の導入もさらに本格的に進む。大陸からの移住者の増加、それによる馬匹生産などの大陸系の文化や技術による新しい生活や生産の定着は、東日本などでもこの時期から広く認められる〔若狭2015〕。前段階の上位の有力者から、人口の回復によって再興した在地の代表者層に引き継がれた新しい生活や生産を梃子として、中期後葉には、在地社会の再編成が各地で進展したと考えられる。なおこの頃、武装具の様式が画一化され、在地代表者層に対してそれが盛んに供給されたことなどは、これまで軍事組織面からの評価がたびたびなされてきたが、実際には、この時期における在地社会再編の一端を反映しており、それが倭王権と在地代表者層との緊密なつながりのもとで展開したことを示すものであろう。

律令社会への波動 その後、6世紀前半に当たる古墳時代後期前半には、集落の住居数に再度の一時的な落ち込みが認められ、小墳群やそれに載る在地有力者層の前方後円墳の築造も低調になることを、岡山平野において指摘した。同様の現象は大阪平野など他地域においてもしばしば指摘

があり、「536年の噴火」[河合2014, 新納2014]との関連も想定されている。ただし、この一時的低落は、西日本一帯にはあらかた敷衍化できそうであるが、墳墓造営をみる限り、東日本には必ずしも当てはまらない。埼玉県埼玉古墳群のように、ちょうどこの時期に盛期を迎える上位有力層の大型前方後円墳も多く、在地代表者層の中小前方後円墳もこれに伴った隆盛をみせる事例が、東日本にはいくつかみられる。西日本でも、紀伊北部の岩橋千塚古墳群のように同様の状況をうかがわせる事例がある。

大型前方後円墳や、それを受け継ぐ大型の円墳・方墳の築造は、東日本においては古墳時代後期後半の6世紀後半にかけても継続する。いっぽう西日本では、近畿の中枢などの一部の地域を除くと、大型墳の造営は減り、代わりに小墳群の三たびの急増があり、それらは横穴式石室を内蔵して、場所によっては著しい集中をみせる（いわゆる群集墳）。ただし、これらの小墳群中に築かれる中小前方後円墳は、地域によって粗密があり[松木2004]、6世紀が終わるまでには認められなくなる。

岡山平野においては、横穴式石室をもつ後期後半の小墳群は、それをもたない中期後半～後期前半の小墳群からそのまま移行する例もあるが少数で、多くは新たな場所—それまでの小墳群よりも奥まった山地側—に営まれ始める場合が多く、数はほぼ倍増する。これと同時に、集落の拡大や住居数の顕著な増加も認められる点から、新たな小墳群の造営、すなわち造墓単位集団の統合や再編は、三たびの人口の拡大を背景として生じた可能性が高い。後期後半の6世紀後半に人口が拡大して小墳群が増加するのは、西日本では広く認められる現象であり、この人口増加に促された社会の再編成が、「古代国家」「成熟国家」と評価される、いわゆる律令社会の確立に結果したと考えられる。

このような次段階の社会に向けての歩みを告げる小墳群の造営は2～3世代にとどまり、すでにそこには、「前方後円墳体制」を演出してきた前方後円墳・前方後方墳等々の墳墓による身分や立場の意図的な表示は認められなくなりつつあった。このことから、西日本では、墳墓という象徴に代わる別のものが、律令社会に向けての社会再編成においては重要な役割を果たすようになっていたと考えられる。ただし、墳墓の築造が西日本に対して比較的遅くまで顕著に残存する東日本では、律令社会への移行やその内実に、西日本とはやや異なった固有の経緯や事情を想定しなければならぬ。

おわりに

小墳群と集落という、社会の基層の動態を反映する資料の分析を通じ、地域の視点に立って、倭王権の構造および形成と変化の過程を復元しようと試みた。結果として、前方後円墳を中心とするいわゆる「首長墓」や、そこに副葬された「威信財」を中心として復元されてきたものとは異なった姿の倭王権が浮かび上がった部分も少なくなかろう。とくに、首長の系譜や、威信財の伝世と副葬のタイミング[川西1975, 森下2005, 上野2012]の考察などからとらえられてきた「地域」の実体やその連続性とは何なのかについて、ポピュレーションの変動という事象を軸に、むしろ「地域」の実体の曖昧さや連続性の乏しさに光を当て、構造変化の繰り返しとしての古墳時代歴史像を強調する形となった。

このような歴史像は、ポスト「首長系譜論」の所論群として昨今多くの提示をみる交通・物流な

どの「ネットワーク」を軸とした古墳の変動論とも触れ合うところがある。これらの所論で最大公約数的に示されるモデルは、倭王権の政治変動がそこに連なる各地首長の結びつきを変え、優勢な古墳を築く各地首長相互のネットワークを更新することによって有力な古墳を築くところが地域の中で変転していくという、ネットワーク社会たる現代情勢を過去に投影したかのような認識に基づいている。現代社会へのまなざしが、過去をどう認識するかという歴史叙述のスタイルそのものに投影されることは、現在と未来に生きる人文・社会科学としての歴史学・考古学のむしろ面目をなすものとして積極的に評価すべきであるが、それが地道かつ実証的に過去の事実を一つ一つ復元していく営為と反目することがあってはならない。また、「首長系譜」論や「威信財」論から組み立てられてきたような従来の歴史叙述との弁証法的対話も、新たな歴史叙述の健全な発展にとって必須の作業であろう。新旧広狭多様な視座に立ったさまざまな方法による立体的な復元作業が、これからの古墳時代研究には求められよう。

註

(1)——筆者はこれまで「大和王権」「ヤマト政権」などの用語を使ってきたが、本論では、属する共同研究名が冠する「倭王権」を用いることとしている。これらの用語によって示される内容に変わりはない。

(2)——出土した鏡の編年による（下垣仁志氏教示）。

(3)——3号墳は前方後円墳とされるが、確実でない。

(4)——こ図2のグラフの住居数がここの文章中で述べた住居数に満たない理由は、図2は弥生時代末～古墳時代初頭と古墳時代前期前半の二つの時期のそれぞれに一方に属することが判明している住居数のみを示しているのに対し、ここの文章中で述べている住居数は、その二

つの時期のどちらかに属していることは間違いのないけれどもどちらなのか不確実な住居の数も含めているからである。

(5)——ただし、この時期には近畿各地でも住居数の減少が指摘され、人口の減少が起こっていた可能性が高い。また、近畿でも、この時期には古市・百舌鳥古墳群の成立という造墓パターンの大きな変動がある。このような造墓パターンの変動が、実際にどのようなメカニズムを通じてこの時期の人口の変化と連動したのかについては、岡山平野と近畿の両地域で、さらに綿密に比較検討をしていく必要がある。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域一」『古代文化』44-6, pp.35-49.
- 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態」『調査研究集録』8, 横浜市埋蔵文化財センター, pp.133-164.
- 安藤広道 1996 「大型方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』18, pp.48-57.
- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター, pp.117-143.
- 岩松 保 1992 「墓域の中の集団構成—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—」『京都府埋蔵文化財情報』44, pp.14-24.
- 岩松 保 1992 「墓域の中の集団構成—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—」『京都府埋蔵文化財情報』45, pp.1-15.
- 上野祥史 2012 「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』173, pp.477-498.
- 宇垣匡雅 1992 「弥生墳丘墓と前方後円墳」稲田孝司・八木充編『新版「古代の日本」』④中国・四国, 角川書店, pp.93-114.
- 宇垣匡雅 2004 「帆立貝形古墳の特性」広瀬和雄ほか『古墳時代の政治構造』青木書店, pp.235-245.
- 宇野隆夫 1995 「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ—東日本からみた日本国家の形成過程—」金岡愷・置田雅昭編『古墳文化とその伝統』勉誠社, pp.75-97.
- 会下和宏 2015 『墓制の展開にみる弥生社会』同成社
- 大久保徹也 2000 「四国北東部における首長層の政治的結集」『古代学協会四国支部第14回大会 前方後円墳を考える 研究発表要旨集』古代学協会四国支部
- 大庭重信 2014 「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』38, pp.47-65.

- 大林太良 1986 「民族学からみた弥生集落」『弥生文化の研究』7, 雄山閣, pp.167-176.
- 大村 直 2015 「邪馬台国時代の房総」香芝市二上山博物館友の会・ふたかみ史遊会編『邪馬台国時代の関東 ヤマト・東海からの「東征」と「移住」はあったのか』青垣出版, pp.31-56.
- 小郷利幸・草原孝典・馬場昌一・森 宏之「吉井川, 砂川流域の古墳の測量調査 (1) —古墳時代前, 中期の首長墓の動向」『古代吉備』19, pp.150-172.
- 亀山行雄 1997 「第5章第2節 古墳時代の津寺遺跡」亀山行雄・大橋雅也編『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116, 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会, pp.608-621.
- 亀山行雄 1998 「第5章第2節 古墳時代前期の津寺遺跡」高畑知功・中野雅美編『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127, 日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会, pp.712-717.
- 河合 潤 2014 「西暦536年の謎の大噴火と地球寒冷期の到来」『ディスカヴァー・トゥエンティワン』
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋納と鏡の伝世」『考古学雑誌』61-2, pp.17-47.
- 菊地芳朗 2001 「東北地方の古墳時代集落—その構造と特質—」『考古学研究』47-4, pp.55-75.
- 岸本道昭 1995 「断絶の中期と後期」『研究紀要』3, 大阪府埋蔵文化財協会, pp.53-72.
- 草原孝典 2009 「古墳時代前期における首長の存在形態—岡山平野における古墳の築盛状況から—」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第1号, 岡山市教育委員会, pp.14-40.
- 草原孝典 2014a 「足守地域における弥生時代から古墳時代にかけての集団関係」『南坂1号墳・南坂遺跡—弥生時代の集落遺跡と古墳時代中期の円墳—』岡山市教育委員会, pp.74-87.
- 草原孝典 2014b 「古墳時代前・中期の古墳群にみる集団構成—弥生時代の集落遺跡と古墳時代中期の円墳—」同上, pp.87-102.
- 葛原克人 1991 「巨墳の造営」『岡山県史』第2巻原始・古代1, pp.381-425.
- 公益財団法人かながわ考古学財団 2015 『海浜型前方後円墳の時代』同成社
- 古代学研究会編 2016 『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 近藤義郎 1956 「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』10, pp.2-10.
- 近藤義郎 1977 「前方後円墳の成立」『慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 考古論集』, pp.249-256.
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店
- 酒井龍一 1981 「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」『亀井遺跡』, (財)大阪文化財センター, pp.239-251.
- 重根弘和 2002 「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻, 古代吉備研究会, pp.343-362.
- 下垣仁志 2012 「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』59-2
- 下垣仁志 2013 「鏡の保有と「首長墓系譜」」『立命館大学考古学論集Ⅶ 和田晴吾先生定年退職記念論集』, pp.189-201.
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』文藝春秋
- 菅原康夫 1983 「徳島における発生期積石塚の—様相—」『考古学ジャーナル』225, pp.30-34.
- 杉井 健 2001 「朝鮮半島系渡来文化の動向と古墳の比較研究試論—九州本島北部地域を題材として—」『考古学研究』47-4, pp.90-104.
- 鈴木一有 2014 「七観古墳出土遺物からみた鋳留技法導入期の実相」阪口英毅編『七観古墳の研究—1947年・1952年出土遺物の再検討—』七観古墳研究会, pp.353-380.
- 田中新史 1986 「出現期古墳の理解と展望—東国神門5号墳の調査と関連して—」『古代』77, pp.1-53.
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22-3, pp.31-61.
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会—』柏書房
- 田中良之 1998 「出自表示論批判」『日本考古学』5, pp.1-18.
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22 史学篇, pp.1-16.
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』343, pp.5-39.
- 都出比呂志 1993 「国家形成の諸段階—首长制・初期国家・成熟国家—」『歴史評論』551, pp.3-16.
- 寺澤 薫 1988 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ, pp.99-111.
- 寺澤 薫 1998 「集落から都市へ」都出比呂志編『古代国家はこうして生まれた』角川書店, pp.103-162.
- 寺澤 薫 2016 「王権はいかにして誕生したか」古代史シンポジウム「発見・検証日本の古代」編集委員会編『纏向発見と邪馬台国の全貌 卑弥呼と三角物神獣鏡』角川文化振興財団, pp.58-85.

- 中塚 武 2010 「気候と社会の歴史を診る樹木年輪の酸素同位体比からの解説」和田英太郎・神松幸弘編『安定同位体というメガネ—人と環境のつながりを診る』昭和堂, pp.38-58.
- 新納 泉 1992 「巨大墳から巨石墳へ」稲田孝司・八木充編『新版[古代の日本]』④中国・四国, 角川書店, pp.115-132.
- 新納 泉 2014 「6世紀前半の環境変動を考える」『考古学研究』60-4
- 西川 宏 1975 『吉備の国—古代の国々5』学生社
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10, pp.154-207.
- 野崎貴博 1999 「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究』46-1, pp.33-51.
- 平井 勝 1982 『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47, 岡山県教育委員会
- 平井 勝 1999 「岡山における弥生時代のムラとクニ—投馬国から吉備国へ—」『古代吉備』21, pp.79-119.
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編, pp.24-26.
- 藤沢 敦 2004 「陸奥の首長墓系譜」広瀬和雄ほか『古墳時代の政治構造』青木書店, pp.133-153.
- 北條芳隆 1985 「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価—成立当初の畿内と吉備の対比から—」『考古学研究』32-4, pp.42-66,41
- 北條芳隆 1999 「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室, pp.205-229.
- 北條芳隆 2000 「前方後円墳と倭王権」北條・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす』青木書店, pp.77-135
- 松木武彦 1993 「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団—鹿田遺跡の地域史的位置づけ—」松木・山本悦世編『鹿田遺跡3—第5次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊, 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター, pp.157-156.
- 松木武彦 1994 「吉備の蓋形埴輪—器財埴輪の地域性研究に関する予察—」『古代吉備』16, pp.22-50.
- 松木武彦 2000 「古墳時代首長系譜論の再検討—西日本を対象に—」『考古学研究』47-1, pp.101-108.
- 松木武彦 2002 「三世紀のキビのクニ」考古学研究会例会委員会編『三世紀のクニグニ・古代の生産と工房』シンポジウム記録3, 考古学研究会, pp.3-32.
- 松木武彦 2004 「中国地方における前方後円墳の消滅過程」福永伸哉編『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』（平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書）, 大阪大学大学院文学研究科, pp.27-42.
- 松木武彦 2010 『吉備地域における巨大古墳形成過程の研究』2006-2009年度科学研究費基盤研究（B）成果報告書
- 松木武彦 2011 『古墳とはなにか—認知考古学からみる古代—』角川学芸出版
- 松木武彦 2017 「列島の視点から城野方形周溝墓を読み解く」『城野石棺移築記念シンポジウム 城野石棺を読み解く—古墳出現前夜の北九州—』北九州市市民文化スポーツ局文化企画課, pp.18-21.
- 溝口孝司 2001 「弥生時代の社会」高橋龍三郎編『村落と社会の考古学』朝倉書店, pp.135-160.
- 森下章司 2005 「器物の生産・授受・保有形態と王権」前川和也編『国家形成の比較研究』学生社, pp.179-194.
- 柳瀬昭彦 1977 「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」柳瀬・江見正己・中野雅美『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16, 岡山県教育委員会
- 山田隆一 1994 「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』3, 大阪府立弥生文化博物館
- 若狭 徹 2007 『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 若狭 徹 2015 『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価：大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」『日本考古学』12, pp.35-54.
- 和田晴吾 1994 「古墳築造の諸段階と政治的階層構成」荒木敏夫編『古代王権と交流3 ヤマト王権と交流の諸相』名著出版, pp.17-47.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年3月23日受付, 2017年7月31日審査終了)

Regional Structure of the Yamato Polity : An Analysis Focusing on Small Mounded Tombs and Settlements

MATSUGI Takehiko

This article aims to explain the regional structure supporting the Yamato polity and its transition in the Kofun period as the history of social dynamics, including not only political but also population and production dynamics. To this end, in addition to the conventional analysis of tombs built for chiefs, such as keyhole-shaped mounded tombs with a quadrangular or round rear portion (collectively referred to as “keyhole-shaped mound”), this article examines the comprehensive structure of burial practices including small-tomb clusters, the rise and fall of settlements that maintain the tombs, and their mutual relationships.

This study starts with the analysis of keyhole-shaped tombs and small-tomb clusters and their spatial relations with settlements in the southern Okayama Plains. The results show that keyhole-shaped tombs are classified into three categories: small ones included in small-tomb clusters; medium ones located near small-tomb clusters; and large ones located independently from small-tomb clusters. They are likely to have reflected the hierarchy of power, from local leaders up to influential potentates directly connected with the Wa dynasty. Among them, the small tombs of local leaders are considered to have formed the basic unit in the regional community, as indicated by the analysis of the relationships between tombs and settlements.

Such small-tomb-based lineages were developed and maintained across the Okayama Plains in the early and middle phases of the early Kofun period, but many declined and disappeared in the late phase of the early Kofun period and the first half of the middle Kofun period while keyhole-shaped tombs were increasing in size and decreasing in number. This transition coincided with a rapid decline in the number of settlements and dwellings, which implies that potentates connected with the Wa dynasty established direct control over the regional community by filling up the gaps caused by the declining population. Under their dominance, the number of settlements and dwellings was restored in parallel with the revival of small-tomb clusters and small- and medium-sized keyhole-shaped tombs based on the clusters in the second half of the middle Kofun period. It is also highly likely that the restoration of population revitalized the regional community and induced the rise of new local leaders. In the first half of the late Kofun period, the number of settlements and dwellings decreased again, and many small-tomb-cluster-based lineages became extinct. The second half of the late Kofun period,

however, saw a resurgence in the number of settlements, dwellings, and small-tomb-cluster-based lineages. After this population restoration, the Wa dynasty started to develop the ritsuryō system of the matured state.

These trends of the construction of keyhole-shaped tombs are likely to have been caused by social dynamics resulting from population fluctuations due to environmental changes and other reasons, rather than reflecting the history of political changes as has been believed.

Key words: Settlement archaeology, chiefly mounded tombs, Wa dynasty, keyhole-shaped mounded tombs, Kibi district